

次 目

<p>聖訓摘要……………</p> <p>新年會即詠……………</p> <p>開目鈔講話(第十六講)……………</p> <p>宗教の尊嚴……………</p> <p>記事</p> <p>○本部關係其他</p> <p>○國費誌料寄附金及維持費領收</p> <p>大藏經要義續篇(其九)……………</p>	<p>本多日生……………</p> <p>本郷日常……………</p> <p>小林一郎……………</p> <p>磯部滿事……………</p> <p>本多日生……………</p>
---	--

號月二年三十四第



財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セシ
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振振ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

本多日生

窪尼御前御返事

唐國に西施と申せし女人は、若菜を山に摘みて老たる母を養ひき。天あはれみて越王と申す大王の狩せさせ給ひしが、見つけて后となりき。これも又かくの如し、親を養ふ女人なれば天も護らせ給らん、佛もあはれみ候らん。一切の善根の中に孝養父母は第一にて候なれば、まして法華經にてをはず。黄金の器物に清き水を入れたるが如く、少しも漏るべからず候。目出度しめてたし。(編纂遺文錄)
これは眞に有難い御文章であります。支那の有名な西施といふ婦人、後には越王が呉の王様に贈つて呉の王様がこれに溺れて遂に呉の天下を失ふのですけれども、併し西施は越王の爲に働いたのであるから、決して悪い者ではなからうと思ふ。その西施は、越王勾踐が狩に行つた時分に、貧しい山家に住んで居つたのを見出して、どうしてもあの女を後にしたいといふ事で、この西施を后としたのである。それはこの女が親孝行であつて、山に行つて若菜を摘んで、老たる親に軟かなるしたしを拵へて上げたい

といふので出て居つたのを、狩に行つた越王が見つけて「お前は何を探つて居るのだ。私のお母さんが年を老つて軟かな物しか食べられませんが、野菜を摘みに來ました」と優しく答へたものであるから、容色も好かつたのであるけれども「それは眞に優しい良い考への女だから……」といふので之れを后にしたのである。後に吳の王様の所に往つて、吳の國が亡びたのは、やはり越王を助ける精神からした事である。越王は始めは戦に負けて吳に生擒にされて、吳の牢屋の内に囚はれる身となつて居つたのであります。その時に彼の茫蓋が魚賣に化けて越王勾踐に内通をして、魚の腹の中に手紙を入れて牢の中に送つて打合せをした、さうして西施を吳の王様に贈物としたのである。所がこれが非常な美人であつたものだから、吳の王様の夫差といふのがこれに惚けてしまつた、又惚けさすべく西施も全力を注いだ譯である。さうして朝も晩も宴會をつゞけて、夜が明けても雨戸を開けてはいかんと言つて、晝間でも燈火を點けて、夜となく晝となく、何日経つたか判らぬやうにして、飲んで寝、飲んで寝して居つた。その時に伍子胥といふ夫差の家來が非常に歎いて、吳王が御殿で酒盛をして御座る所に、草鞋穿きで蓑笠を着て飛込んで行つて「御意見を申し上げたい」と言つた、所が吳王は非常に怒つて「人が宴會を開いて樂みをして居る所に、土足で登つて來るといふことがあるか」その時に伍子胥が言うたのは「あなたのお眼には此處は御殿と見えませうけれども、この伍子胥の眼には草原になつて居ります、草鞋を穿かなければ歩けませんぬ、あなたの様に毎日酒色に耽つて居れば、必ずや越王勾踐が兵を練

り、時を圖つて遂にこの吳の國を滅ぼすものであります」と言つた、果せる哉三年経たぬ中に越の國から軍を起して之れを攻めて、吳は遂に亡ぼされてしまつたのであります。そこで吳を滅ぼした方からいふから、西施といふのは美人だけれども彼奴油斷のならぬ女だといふけれども、越王の利益を圖つてした方から言へば、實に立派な女丈夫であると考へられるのであります。

日蓮聖人は、今窪尼が親孝行の精神に依つて法華經の信仰をなされ、功德を積まれるといふのに對して、西施は若菜を摘んでさうして越の王様の后になられた譯であるから、あなたが法華經を通して親孝行をせられるその功德は、恰も金の器に清い水を容れたやうな美しい事で、一滴も水の漏らない金の器に容れた水の漏ることの無いやうな、立派な功德を積まれて居る譯である。それ故に佛も怒み給うてあなたをお守りなさるに違ひないといふ事を言はれたのである。日蓮聖人は唯だ「お題目を唱へるばかりが功德善根ぢや」とは仰しやらない、それは無論結構だけれども、法華宗の者は親不孝でも題目を唱へてさへ居れば宜いかといふと、さうではない、茲には「一切の善根の中に孝養父母は第一にて候なれば」とある、いろ／＼善根功德があるけれども親孝行が最も大事なこと、一切の功德の根本である、孝は百行の本といふ。それを法華經の信仰を通して、親孝行といふのでありますから、金の器に綺麗な水を容れたやうなものであると言はれる、どちらをどうお譬へになつて居るか判らぬけれども、法華經が金の器で、親孝行が綺麗なき水であるといふ意味であらうかと思ふ。法華經の信仰とさうして

親孝行は、それは金の器に清き水を容れたるが如しと言はれた、斯ういふ所を法華宗の者は味はなければならぬ、器さへ金の器であれば、清泥を容れても宜いといふやうな事ではいかぬ。それが今のドンドコ法華の方は、金の器なら宜いけれども、缺けた乞食の碗に泥を盛つたやうな風で、段々減茶々々になつて行く、甚だ行き方が悪い、唯だ安賣専門で何でも宜いといふやうなことをいふが、それはいかぬ。「金の器に清き水を容れたるが如く」、これが日蓮主義でなければならぬ。それは何も難かしい事はない、物質的のものであるならば、乞食の碗は無代で貰へるし、金の器は五千圓もかゝるといふことになる。けれども、宗教といふものは、正しき信仰をしやうが、ドンドコ法華にならうが、それは錢金の問題ではない、己の精神が一轉すれば金の器の如き信仰になり、少し不注意であれば乞食の缺けた茶碗になるのであるから、そこを考へなければいかぬ、同じ法華宗の信心々々と言つても、それを唯だなまぬるく「缺けた茶碗でも構はぬ」といふやうな事ばかり坊主の方でも言ふし、信者の方も「大きにそれで結構です」といふやうに、寄つて集つて壊れた信仰を鼓吹して居る、この行き方は大改革をしなければならぬと私は信じて居るのであります。

寶輕法重事

妙法蓮華經第七に云く、若復た人有つて七寶を以て三千大千世界に滿て、佛及び大菩薩、辟支佛、

阿羅漢に供養せん。是の人の所得の功德も此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きは如かじ云云。文句の十に七寶を四聖に奉るは、一偈を持つに如かずといふは、法は是れ聖の師なり、能生、能養、能成、能榮、法に過たるは莫し、故に人は輕く法は重き也云云。(論綱遺文錄)

これは一つ注意して置かなければならぬ事で、法華經には法を褒めた言葉が澤山ある、その法といふのもそれはお經である。元來法といふ言葉はいろ／＼に使はれるのであります、大體法華宗の人は法といふ事の意味が混亂してしまつて居る。「何でも法ぢや」といふが「法とは何ぞ」といふことが判らない、茲にいふ「法」といふのは教を指すのである、「教法」と言つて教の法である、法華經といふのは教である、それからその法華經の中に在る眞理といふやうなのは之れを「理法」といふ、それから修行に移していふ時には「行法」といふ事になる。それから自分の事をいふ時がある、それは即ち「人法」といふのである、佛様のことを法といふ時には「果法」といふ。先づ理法といふのは大體は宇宙に就いて言ひ、人法は人身觀に就いていふので、これは心である、果法といふのは佛である。この三つが大體は法の本質である、その法を説いたものが教である、それに依つて行が起つて居る、斯ういふ事になる。南無妙法蓮華經といふ修行をするのも、これは唯だ「法」といふ言葉で現はされる、そこでこれが混亂をするのである、理法といふ場合も法である、教といふても法である、修行でも法である、佛でも法であるから、そこでその區別をちよつとも心得ずに行くと、何もかも法といふやうな譯で、さつぱり判ら

ない、「ホー、ホー」と言つて鼻が鳴いて居るやうなものぢや、何でも法、のりつけホー、といふやうなもので、實に暗愚なものである。それはこれが混線して居るからオチャ／＼である、學者が言ひて居る事すらもメチャ／＼であるから、學問しない者は全くのりつけホーぢや。

そこで今この文章には、「法が有難い、他の佛や或は菩薩などは法華經から生れたものであるから」といふ事が説いてある。所が同じ佛といふ中にも、法華經から生れた所の佛、菩薩といふのと、この法華經を説き與へる所の佛といふのと二つある、これは前にも申ししたが、壽量品にいふ常説法教化で、常に法を説くその常説法の中に法華經といふものが出て居るのである。この常に法を説くといふ本佛と、この常説法の中に説かれて出て來る所の佛とある、之れを迹佛といふのである。だから法華經は能生であり、佛は所生である、法華經は親であり佛は子であるといふ、この親の法華經を説くまたその親の本佛といふものがあるのである。説かなければ法華經は無いだらう、説かない法華經と言つたならばそれは宇宙そのもの、實相の唯だ理である。これは餘程能く考へなければならぬ事である。普通の人の頭ではちよつと捌きがつかぬか知らぬけれども、妙法の「法」といふものは、宇宙を説明するか、自分を説くか、佛を説くか、この三つより無いものである。所が「十界の頂上の妙法」などと言つたりする人がある、十界の頂上というと、佛から地獄に至る迄の十界の、その上にある頂上の妙法だといふ、何だか判らないけれども十界を超越した妙法だといふ、それは唯だ言葉だけさういふ事を言ふて居

るのであつて、そんなものは有りはしない。佛の頭の上にあるといふやうな事は、首楞嚴經といふお經にもある、首楞嚴といふ事は白傘蓋といつて、白い傘みたやうな物が佛の頭の上にあると説いてある、その白傘蓋といふ物は何ぢやと言へば、それは吾々の佛性を説明して居るものである、吾々の佛性からして佛が出て來るといふので、佛も本は凡夫なり、凡夫は親なり、佛は子なりといふ思想である。これは何かといふと、今の十界の頂上に凡夫があるといふ事になる、それは今申す迹佛に就いての話である。哲學的に考へれば直ぐ判ることであるけれども、頭の上にあるとか何とかいふものだから、非常にえらいと思つてグラ／＼してのりつけホーとやつて居る、さういふことはいかぬ。茲に言はれるやうな事は、念佛宗が阿彌陀様などを佛として非常に有難がるから、さういふ佛よりは法華經は親であると言はれるのであつて、この法華經を説きし本佛釋尊を論ずるものでないといふ事を考へて置かなければならぬ。故に日蓮聖人が佛よりも法華經が有難いといふのは、念佛宗などに對していふ言葉である、自分の立てる所の本佛に就いていふのではない、さういふ事はちやんと區別を立てなければいかぬ、それが中々混線し易くなつて、その爲に今の法華宗が間違つて居るやうに私は思ふのであります。それから又「妙法五字の光明に照されて」といへば、唯だ文字で、お題目が光明點で書いてあるからといふやうな事をいふ、さうしてこれが宇宙の本原に於いて、こんな字が其處にビカ／＼光つて居つた、お題目の旗が立つて居つた、「その旗は誰が造つた、その字は誰が書いた」、「イヤ書かぬ前から光つ

た居りました、その側に早く参つた者が佛である」といふやうな事を言ふて居る、そんな事は思想の問題としては實に愚な事である。妙法曼陀羅のさういふ思想は眞言あたりの思想からして、日蓮聖人もさういふ事を言はれては居るけれども、それが法華經の一番大事な教義と想うてはいけない。

法華經の一番大事な教義は、お題目はどの點にあるかといへば、これは毒量品にあるが如くに、本佛は良醫、妙法蓮華經は良藥、吾々は毒に中てられて居る子である、この佛と吾々との間に屬するものである、それを決定しなければいかぬ。その點は日蓮聖人の御遺文がいろ／＼になつて居るけれども、それは今後さう決定せなければならぬ、佛と吾等の信仰といふもの、間に妙法があるのである。「本尊鈔」には「佛大慈悲を起して妙法五字の中に此の珠を裏みて、末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふなり」と言はれた、或は岸の上の人が岸の下に墮ちかけて居る人を救ふが爲に網を下げた、網とは法華經なり。或は毒量品の良醫、良藥、病子或は又母と乳房の赤ん坊といふ譬へのやうに、どうしても「佛さうして妙法」といふことでなければ、毒量品の教義は成立たぬ。併し日蓮聖人のお言葉の中には、今のやうに法は親なり佛は子なりといふ事もあるが、その時分に「子」といふ言葉があつたら、必ず本佛が説きし教の下に出て来る迹佛といふことに考へなければならぬ。これは「日向記」といふ書物の中に、何故に四聖が法華經より劣るかといへば、それは「滅歸する四聖なるが故に」と説かれて、迹佛といふことが明かになつて居る、滅歸するとは消えて亡くなる者といふことであつて、本佛で無いといふことをちやんと日蓮聖人が言ふて居られる。それはお言葉の末などを辿らなくとも、發遣顯本せざればまことの一念三千も顯はれず、本佛顯はれざる時は一切萬事壞れてしまふのである、それが哲學的思想の上に確立せんやうな頭腦はボン暗頭で、ナンボ言ふても判らん、そんな頭腦で世界に法華經を廣宣流布しやうナシといふならば實に夢である。今後の思想界に持ち出したならば「お題目といふものは何ぢや」「世界の頂上ぢや」「頂上とは何だ」「三階の屋根の上だ」「屋根の上とは何だ」といふやうなことで、直ぐ行詰つてしまふ、そんな空虚な事ばかりいつて何になるか、説明が出来まい。「妙法の法とは何だ」「何だつて何だ……」それで世界に弘まるかどうかぢや。

だから妙法を聲として有難いと説かれた時、字として有難いと説かれた時、眞理として有難いとして説かれた時、それから佛を通して佛の功德一切が揃うて居るから有難いとして説かれた時と、この四つある。その内でどれを探るかといふ事はつきり極めさへすれば宜しいのである。聲として唱へるといふ方から来た妙法「南無妙法蓮華經」と聲も惜まらず唱ふるなり」といふ、その聲は結構である、けれども法華宗の一番よい所は聲ではない。それから「五字の光明に照らされて」といふ字の光で行くといふ、「一番えらいものは字ぢや、字を以つて本源とするのぢや」といふ思想がある。それから眞理の光として行く思想、これはマア大分よいやうであるけれども、佛教といふものは眞理の光ではいかぬ、人格まで來なければならぬのである、唯だ眞理の光なれば方便品の諸法實相の妙理である、これは法身の佛で

ある、それが更に進んで三身即一の如來であり、さうして茲に本佛を顯本する所まで行かなければならぬ、眞理といふて居るのは、本當の所まで行くにはまだ大分距離がある。であるからさういふ眞理といふことだけでは足らぬ、眞理で宜いなれば宗教は要らない。又眞理といふやうなものは、呼んだ所が答へるものではない、『眞理さま〜』と言つて呼んだ所が、何の感應もない、眞理といふものはそれこそ洵に冷かなものであつて、火を握つたらどんな可愛い、子供の手でも焼いてしまふ、どんな優しい親の手でも焼いてしまふ、それが眞理である、火を見て『焼いて呉れるな〜』といくら頼んだ所が駄目である。人間ならば——その心があるならば、そこに精神的感應といふものを起して来る。宗教が對手を冷かなる眞理に置いて、『頼みます〜』ナンといふのは野暮な話である。だから眞理でも聲でも駄目である、さういふ事も澤山御遺文にあるけれどもそれはいかぬ、どうしても本佛の力、さうしてそこから顯はれて居る所のもでなければならぬ、無論唱へ言葉として之れを用ひないのではない、唱へ言葉の妙法も『本佛、さうして唱へ言葉』本佛、さうして字の光『本佛、さうして眞理の光』といふのならば宜いけれども、本佛を忘れた時には究極が字になつたり、聲になつたり、眞理になつたりする、それは一番大事なものではない。

この四つの中で聲の方から來た妙法といふのは、大體は淨土門に對して起る思想である、向ふが稱名往生といふ事を言つたから、それに對して唱題行が起つて、南無阿彌陀佛といふが如くに南無妙法蓮華經といふことが起つたものに違ひない。それは有難いけれども唯だその唱へ言葉を以つて一切を説明せんとした時には、行詰りになつて、逆も思想の問題で捌きがつかない、今迄有難く思ふて居る者はこれでも宜いけれども、新たに進んで來る者はそれではどうしても理解することが出来ない。それから字といふ方は何處から來るかといふと、これは即ち眞言に就いて起つたものである、眞言が阿字といふことを非常に主張するから、『お前の方の阿字ばかりがよいのではない、妙法の文字も光つて居るぞ』といふので、向ふが字がよいといふからこつちの字はもつとよいといふので、お題目が光つて居るといふのである。日蓮聖人の哲學的思想の根本にお題目が光つて居つて、それで妙法の文字が出て來たといふやうなものではない。それから眞理の光といふことは天台に對して起つた思想で、日蓮聖人は左様な冷かなる眞理を極點に置いて居らぬ、故に『開目鈔』に於て『毒量品を知らざる諸宗の學者畜生に同じ』といひ、或は『本尊鈔』に於て『法は甚深なりと稱すと雖も、種熱脱を論ぜざれば還つて友斷に同じ』と言つて、何處までも本佛を光顯したものである。併し今の法華の行者の中に於ても、この大事な所を誤魔化さんとする者が澤山居る、殆ど今日ではその方が多い、實に憐れな者である。吾々は眞理を攻撃しない、等は皆閻魔の朝廷に引出さるべき運命を有つて居る、實に憐れな者である。吾々は眞理を攻撃しない、吾々は南無妙法蓮華經を唱ふる聲を攻撃しない、吾々はお題目の文字が尊いといふことを攻撃しない。けれども法華宗の極點が字である、聲である、眞理であるといふやうな事に引つかる、やうな馬鹿者と

して一生を終ることは出来ない、吾々は活ける絶対の本佛を戴き、さうしてこの無限の力の中に攝取せられなければならぬ。壽量品にはその通り説いてある。それであるからこの本佛の光として來る所のものは、壽量品の中心の教義から來た所の思想である、これが正系である、眞理とか文字とか聲とかいふのは、日蓮聖人の教義の傍系の思想である。だから『觀心本尊鈔』の結文を忘れぬやうにすれば宜いといふのである。『佛大慈悲を起して』といふこの佛に感發する精神がなくてはならない。それはあらゆる點から立證し得られる事である、唯だ學者が弁を好んでこの大事な事を誤魔化さうとするのは洵に歎かましい。御遺文の中でいろ／＼控ね廻せば、結局判らぬやうになる、今茲にある通り『人は軽く法は重きなり』とあるぢやないか、人とは佛ぢや、是れ如何といふやうな事をいふから、素人は『成程さうかな、人は軽く法は重しとはつきりありますナ』といふやうな譯で誤魔化されて行くのである。こんな事で専門の者が人を迷はすやうな事を言ふといふのは何事であるか。これは唯今申す通りに他の宗旨に對して、根本教義の以下に於て起る問題である、若しその事を心得ずにやつて行けば、法華宗のお曼陀羅と言つた所が、唯だ澤山並べて、波羅門の神でも何でも古道具屋の店みたやうに飾り立てゝあるだけだと言つて悪口をいふ者がある、それを捌くことが出来なくなる、唯だ並べただけで何でもあるといふだけならば、古道具屋と撰む所はない。それはやはり眞言の思想であつて、法華經の思想ではない。法華經は澤山集つても釋尊を中心にして、寶塔品の時から、十方の諸佛が來つても皆釋尊を中心にして

吾等はその分身なりといふ事を現はした、大勢ウヂヤ／＼寄つて來てガヤ／＼したといふやうな事は、法華經の中に何處にも無い、その統一の中心を示さんとすると、雜然として澤山あるといふのは違ふ。

いろ／＼さういふ大事な點に於て、今後日蓮の教學を明かにして行かなければならぬ、それを混亂に導かんとするといふ事は、如何にも罪深き所行である、左程に精しくないものを誤魔化さうと思へば何でもないことである、その人の迷ふやうな言葉を引つばつて來て教義を混亂に導くやうな事をやつて居る者は、實に惡魔の使であるといふは斷言する。

法華經は佛滅後二千二百餘年にいまだ經の如く説き究めて弘むる人無し、天台傳教も知るし召さるるにはあらず、時も來らず機もなかりしかば、書き究め盡さずしておわらせ給へり。日蓮が弟子とならむ人人は易く知りぬべし。一閻浮提の内に法華經の壽量品の形像をかきつくられる堂塔いまだ候はず、いかてか現はれさせ給はざるべき。(編遺文錄)

これは同じ『寶經法重事鈔』に於て、之れを併せて考へて見なければならぬ。今まで法華經を弘めなければならぬ、本當に法華經を弘めて居る人が無い、それを日蓮に依つて法華經の眞實を顯はしたからして、日蓮の弟子は容易くその大事な所を知ることが出来る『易く知りぬべし』である。その易く知るといふことは何かといふと、その次に書いてある通り、一閻浮提の内に法華經の壽量品の釋迦佛の形像を

かきつくりつた堂塔は一つも無い、いかでか現はれさせ給はざるべき」で、日蓮に依つてこの壽量品の釋迦牟尼佛を尊敬するといふこの精神が、どうして現はれずに居るべきかといふ事が書いてある。これは前に申した釋迦如來は本佛としての佛であるから、斯ういふ思想が起る譯である、若し釋迦如來をも「子」としての佛の中に入れてしまふならば、直ぐ次の此の頁が分らぬことになる。「日蓮が弟子とならん人々は易く知りぬべし」と言はれて居る、それが混亂に導かれるが故に判らないことになつて行くのである。日蓮聖人の一代の御遺文を通じて、本佛釋尊を稱讃せられることは實に到る處にありませ、それをお題目といふものが有難いといふ事に依つて釋迦との優劣を論じて、「釋迦はあかん」といふやうにお題目といふものに依つて釋迦を攻撃するの、阿彌陀如來に依つて釋迦を攻撃するの、本佛釋尊の威嚴を冒すといふ事に於ては同じことで、實に恐れ多いことであります。何處までも三寶を調和して、本門常住の三寶と日蓮聖人が言はれたのであるから、その場合には釋尊を本佛として仰ぎ、南無妙法蓮華經を法寶として、日蓮聖人を僧寶として、三寶一具して之を信じなければならぬ、何の派に於ても「久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛」と唱へない所はないのである、その大恩教主といふことは何を意味して居るのであるか、悪口を言へといふことか、頭を叩けといふことか、南無大恩教主釋迦牟尼佛とは何の爲に言ひ居るのであるか、大恩教主といひながらケチを附けるといふやうな馬鹿があるか、それは愚の骨頂といふものである、實に怪しからぬ事である。故に昔から日蓮宗のさういふ思想を天魔と言つた

ものである、禪天魔と日蓮聖人が言はれたのは、禪宗がえらさうに言つてお釋迦様の頭を毆るやうな事をいふからして天魔であると言はれたのである、法華宗が屁理窟を言ふてお釋迦様の頭を毆るといふならば、これは「法華天魔」といふものぢや、實に怪しからぬことである。何處から論しても、日本の國體から論を立てれば、皇室の尊嚴を冒すやうな議論は、どういふ所からしても許さるべからざるものである、佛法では釋尊の御偉徳を傷つけるやうな議論といふものは、何處から行つてもいかんといふのが日蓮聖人の御主張である。

統一會館新年會即詠

本郷日常

初春に ひとつやかたに 打つとひ なこみあふこそ 樂しかりけれ。
 あのかしゝ、そのなりはひを いそしみて 銃後の守り いやよ固めん。
 時は今 祖師のみをしへ 身に讀みて 不惜身命 たゞさらめやは。

開目鈔講話 (第十六講)

小林一郎

この前は日蓮上人が今までいろ／＼な難を受けて一身にいろ／＼な迫害が加はつたといふことを思ひ出されて、本當の法華經の行者といふものは自分であるといふ自覺を固められたといふ所を讀んで居りました。

今度強盛の菩提心をおこして退轉せじと願しぬ。既に二十餘年が間此法門を申に、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず、大事の難四度なり。二

度はしばらくをく、王難すでに二度におよぶ。今度はすでに我身命に及ぶ。其上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聽聞の俗人など來て重科に行はる。謀反ななどの者のごとし。

それでモウ二十餘年もの間、この法門を申し始めて、日々、月々、年々に難が重つて居る。その小さい難は幾つあるか判らないが、さういふことは一つ一つ考へないにしても二度の大難がある。即ち以前

には伊豆に流され、或は今回は佐渡に流されるといふやうな難がある。これは何故島に流されるやうなことを大難と言ふかといへば、勿論刀で斬り掛けられて殺されるといふのが一番大きな難には相違ないのですが、それは個人的なことである。或る一人の者が日蓮上人を怨んで殺すといふのだから、殺されたといふ結果は大きいにしても、その迫害の種類としては寧ろ小さい事でせう。ところが島流しにするといふのは、國の政府が日蓮上人を罪人と認めての處置なのだから、これは命に關らないとしても、難としては大きい難と言はなければならぬのであります。個人々々の敵ではないのです、國がこれを罪人と認めるといふことなんですから随分大きいでせう。さういふやうな意味で、伊豆に流されたりすることを特に大難であるといふのです。兎に角この日本が法華經の尊いことを認めないことから、斯ういふ大難が來たのだといふやうに解釋をされて居るや

うであります。これは開目鈔ばかりではありませんで、他の御書の中にもさういふやうな意味のことは始終言はれて居るのであります。それで又日蓮上人御自身がさういふ迫害に御遭ひになるのみならず、弟子といひ、檀那といひ、いろ／＼な者が、兎に角法華經を有難いと思つてこれを聽いて居る者はみな難に遭ふといふことであるのでありますから、この迫害といふものは實に大きいものであります。併ながらさういふことは今更驚くには足らないのであつて、法華經の中には末法の世に出てこの教を弘めれば必ず様々な難に遭ふといふやうなことは、豫め説かれてあるのであるから、日蓮は強い菩提心をおこして、決して退轉しまいといふ心に誓を立てたといふのであります。

法華經第四に云く、而も此經は如來の現在にすら猶怨嫉多し。況んや滅度の後を

や等云云。第二に云く、經を讀誦し書持
すること有らん者を見て、輕賤、憎嫉し
て結恨を懷かん等云云。

『法華經の第四に云く』と申しますのは、法華經
の法師品であります。法華經の法師品の中には
『而も此經は如來の現在にすら猶怨嫉多し、況んや
滅度の後をや』と言つてあるのであります。『此經』
といふのは法華經のことで、法華經に説かれて居り
ますやうな事を世の中に弘めるといふことになれ
ば、如來の現在でも、即ち釋迦様が生きて居らつ
しやる時でさへも、これを憎んでその妨げをする者
が出て来る、況してや滅度の後、即ち釋迦様が
亡くなりになつた後に於て、これを弘めようとすれ
ば、いろ／＼な迫害に遭ふといふことは固より覺悟
しなければならぬといふことが言つてあるのであり
ます、これは人情と致しまして、自分の現在やつて

居る事がつまらないものだといふことが明かになる
ことは、これは堪へられないことなのです。人間に
は己徳があるものですから、今自分のやつて居る
ことは相當に善い事だと思つて居ます。そこへ他か
ら善いものが出て来て、今まで自分がやつた事はつ
まらぬのだといふことになれば、それが勝れた人で
あれば、今までやつたことを捨ててモット善い方に
歸依することになるが、普通の人情としては、長い
間折角折つて信じて居た事がつまらないものにな
るので、ドウモ馬鹿々々しいといふことになるので
す。それだから、現在自分の信じて居るものより以上
のものが世の中に弘まることを喰ひ止めたいやうな
氣がする。より以上のものが世の中に出なければ、
自分の今まで信じて居つたものが一番よく通るの
だ。斯ういふやうな心持が起さるのであります。こ
れは凡夫の習ひであります。それで一般の人は餘
り理解の程度も高くないから、佛様の教の低い方の

教を聽いて感心して、自分はこの信心を貫いて行か
うと思つて居るのでせう、そこへ法華經の中に説か
れた教を弘めて、それが弘まれば、今までの低い信
心をして居た人々がつまらないことになるから、さ
ういふ教の弘まらない方が自分達が都合が好いとい
ふので、大勢集つて迫害をするのです。これが『如
來の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや』と
いふことであります。これはナニも昔の時代に限つ
たことでなくて、今の時代でも確にさうでせう。飽
まで正しい事を貫いて、少しの間違ふ許さぬといふ
やうな態度を取つて行けば、世間の人には喜ばれな
い。さういふことになるのと何等かの意味に於て迫害
が來るといふことは、これはどうしても覺悟しなけ
ればならぬと思ふ。如來の現在に於てすらその通り
であるのだから、況して滅度の後、お釋迦様の居ら
つしやらない凡夫同士で以ていろ／＼な事をやつて
居る、さういふ時代に於ては、正しい教を弘める者

の一身に迫害が集るといふことは已むを得ないこと
である。斯ういふことが法華經の第四の卷の法師品
の中に言つてあるのです。

それから又『第二に云く』といふのは、即ち法華
經の譬喻品であります。その譬喻品の中に言つて
あるのには、法華經を讀誦し書持する者を見て、輕
賤、憎嫉して而も結恨を懷かんとある。これは譬喻
品の中に、佛の正しい教に背く者の種類をいろ／＼
擧げまして、その中に斯ういふことがあるのであり
ます。この法華經のやうな教を『讀誦』讀んで、『書
持』これを習つて、それからこれを自分の身に行ふ
といふやうな者があると、世間のつまらない者共は
これを大層憎んで敵にする。その敵にするのには種
類があるので、こゝに『輕賤、憎嫉して結恨を懷か
ん』とありますが、これは四つある譯であります。

輕善
憎善

嫉 善
恨 善

お經の文句を分けて見ると斯う四つになるのです。即ち「善を軽んずる、善を憎む、善を嫉む、善を恨む」斯ういふ順序になる。間違つた心持を以て世の中に立つて居る人はどうも斯ういふ風になつて行く、一番罪の軽い所では「輕善」善を軽んずる。

「あいつは善い行ひをしても大したことはない、自分達とそんなに變りはない、そんなに特別に尊敬をする値打はないだらう」といふやうな心持を持ちます、それが輕善です。

それからモウ少し悪くなると「憎善」といふので、善い者が善い者だとして特別に人に尊敬されるのが忌々しいと思ふ、それが憎善です。これは自分を振返つて見なければさうなりません。少し勝れた者が世間で尊敬されると、「あいつが尊敬されて居るから自分が馬鹿にされて居るのだ、ドウモ忌々しい」

斯うなつて来る。これが所謂憎善であります。これも普通の人情としてはある譯であります。

次の「嫉善」といふのは、善い者が尊敬されるのを嫉んで、何とかして、中傷しよう、傷けようと企てる、それが嫉善です。たゞ嫉むといふだけでない、嫉んで傷けようとする。これも普通の人情です。これは宗教以外の普通の事でも屢々あるのであります。なにか自分より幸福のやうな者、自分より都合の好いやうな者が居るといふと、それが失敗することを望むといふやうなことがある。これは凡夫の、心の足りない者の常であります。自分はドウモ汚い家に住んで居るが、近邊に新しい家を建てて堂々たる構へをして居る人を見ると、チョット忌しくなるから「大嵐があつてあの家が壊れば宜い、さうなれば萬歳だ」といふやうなことになる。来る、自分より上の方の者が酷い目に遭へば、仇打をしたやうに好い氣持になるといふのが凡夫の氣持

であります、それが所謂嫉善で、自分より勝れた者を何とかして引下して見ようといふやうな心持になるのであります。

それから一番終ひは「恨善」で、善い奴があるから自分達が世の中で悪い者だナンといふことを言はれるのだ、それが残念だから善い奴が自分の仇だといふことになつて来る。一番酷いものになるとさうなるのであります。これは私共よく世間でさういふことを経験するのであります。私の知つた者で或る役所に勤めて居て、買物係りをして居つた者があつた。ところがこれが仲間には排斥されてとうとう罷めさせられた。その人に何故排斥されたのかと訊いて見ると、他の者は賄賂を取るが、その男は馬鹿正直で賄賂を取らない。一人賄賂を取らない奴が居ると、自分達の賄賂を取るのが逆も目立つて残念だ、

こいつは憎い奴だといふ譯で、とうとうこれを排斥して追出してしまつた。その男は弱つて居りました。

た。正直にすれば職を失ふ、こんな馬鹿な不法なところがあつたのかと言つて理窟を言つて居つたが、さういふ事實があるのであります。悪い奴が大勢蔓つて居れば善い事をする者は怨まれる。あいつが正直である爲に自分達が賄賂を取るのが不正直だといふやうなことを言はれる、彼奴は仇だといふやうになつて来るのであります。これは一番極端な例であります。人間は間違つて来ればそこまで行きます。ですから輕んじ、憎み、嫉み、恨む、結局は恨んでこれをまるで仇にするといふ所まで行くものであります。

さういふことがモウ法華經の本文に説かれて居るのであつて、昔からさういふことは定まつて居るのだから、今日蓮上人が法華經を弘める爲に迫害に遭つたといつても、これはモウ豫て覺悟のことだ。經文を読んで居る以上はこのくらゐのことは覺悟して居る、自分は少しも驚きはしない。斯ういふことを

言つて居られるのであります。

第五に云く、一切世間に怨多くして信じ難し等云云。又云く、諸の無智の人の悪口罵詈するあらん。又云く、國王・大臣・婆羅門・居士に向つて、誹謗して我悪を説いて是邪見の人なりと謂はん。又云く、數々擯出せられん等云云。又云く、杖木瓦石もて之を打擲せん等云云。

それから「第五に云く」これは安樂行品の中に「一切世間に怨多くして信じ難し」といふことがあつて、いくら善い教を説いてもなか／＼本當の教を信ぜずるといふことが出来ないで、却てその善い教を弘める者を敵として妨げをする者が多い。併し眞心を以てこれを信ずるといふことはなか／＼出来難い。さういふ人は容易に得られないのだといふこと

つてつまらない話であります。ですから佛教に於て無智の人といふのは、佛のお心持の解らない人といふ意味に解釋しなければならぬのであります。佛様のお心持の解らない人が自分勝手な考から「法華經などはつまらないものだ」と言つて却つてこれを弘める者に迫害を加へて悪口罵詈したり、これを攻撃したりするやうなことがあるだらう。これは勸持品の中に末法の世の中のことを豫め考へて言つてあることなのであります。

又これも同じ勸持品の中にあるのであります。又云く、國王・大臣・婆羅門・居士に向つて、誹謗して我悪を説いて是邪見の人なりと謂はん。これは法華經を弘める人が出て來ますといふと、その法華經を弘める妨げをしたと思つて居る者は、自分達の力だけではとても法華經の弘まる勢力を喰ひ止めることが出来ないから、國王・大臣・婆羅門、居士といふやうな、世間の地位あり身分ある人に結び

がある。それから「又云く、諸の無智の人の悪口罵詈するあらん」これは勸持品の中にあることで、無智の人があつて、法華經を弘める者を見るといふと、これは敵だとして悪口罵詈する。罵つたり、誹つたりして、この法華經を弘める者を世間から擯り去らうとするといふことが言つてある。無智の人といふのは、世間の普通の言葉で申せば、なんでも物の判らない人を無智といふのであります。佛教の上で言へば佛様のお心持の解らない人、それが無智の人です。斯ういふ無智の人といふものは非常に多い。兎に角自分の居る場所のことが判らないのが無智です。日本に居て日本がどんな所だか判らなければ無智です。日本に居て日本のことが判つても、その人がアメリカへ行つてアメリカがなんだか判らなければそれは無智です。兎に角自分の身を置く所の判らないのが無智です。佛の教を學びながら佛様のお心持が解らないでは、いくら他の事を知つて居た

付いて、さういふ人の力を借りまして正直に法華經を弘める人の妨げをする。さうして「我悪」といふのは法華經を弘める人です。法華經を弘める人の缺點を無理にでも拾ひ出して、さうしてこれは邪見の人間である、この人間は法華經を弘めるなどと言つて居るけれども、實際は役に立たない者である、こんな者の言ふことを聞いてはいけないといふやうな、所謂惡宣傳を致しまして、さうして法華經の弘まる氣運を挫かうとする者がある。斯ういふことが勸持品の中に言つてあるのであります。

それから又同じ勸持品の中に「數々擯出せられん」とある。法華經を末法の世に出て弘めようとする者は、一度どころではない。幾度も／＼自分の住んで居る所を追ひ拂はれて、安心して何處にも住んで居ることが出来ない。斯ういふことが言つてあります。

それからやはり同じ勸持品ですが「杖木瓦石も

て之を打擲せん」とある。法華經を弘めて居るといふと世間の人がこれを憎んで、杖を以て打つたり石を投げつけたり、瓦を投げつけたり、いろ／＼まはり中からこの人に對して迫害を加へる者があると云つてあります。

これらの法華經の本文をよく読んで見るといふと、如何にも日蓮上人が自分の身に思ひ當るといふのであります。その通りである、自分は長い間法華經を弘めて居て、罵られたり謗られたり、石を打ちつけられたり、棒で打たれたり、或は刀を以て斬り掛けられたり、而も伊豆と佐渡とに二度も流罪になつて居るのでありますから、如何にも法華經の本文が自分の一身に思ひ當るといふことを言はれるのであります。

涅槃經に云く、爾時に多く無量の外道有つて、和合して共に摩訶陀の王阿闍世の

自分の志として居たのです。その第一著手として先づ兩親を押籠めてしまつて、自分が王の位を奪つて自ら王となつた。お父さんの頻婆沙羅王といふ方は押籠められて居る間に病氣を發して死んだのであります。それから後も佛敎を迫害するといふことに就ては随分いろ／＼なことをやつたのであります。然るに晩年に至つて自分の過ちを悔いまして、佛敎の歸依者になりました。わざ／＼佛様の所に行つて一切の過ちを謝して、今日から佛様を信する者になるといふことを誓つたのであります。非常にこの人は晩年に於ては功德を植ゑた人であります。チヨット本文と縁がないことですが、こゝで序に申上げて置きますが、お釋迦様が御入滅になつて後に、お釋迦様の主なお弟子が何を一番大きな事業と考へたかといへば、お釋迦様の五十年間にお説きになつた敎を纏めて後の世に間違のないやうに傳へたといふことであつた。これはマア勿論のことであ

所に往く。今唯一大惡人あり、瞿曇沙門なり。一切世間の惡人、利養の爲の故に其所に往集して、眷屬と爲つて、善を修する事能はず。呪術の力の故に迦葉及び舍利弗・目犍連を調伏す等云云。

それから今度は「涅槃經」の中に「爾時に多く無量の外道有りて、和合して共に摩訶陀の王阿闍世の所に往く」と言はれて居る。阿闍世といふ人は今までも申上げたのであります。頻婆沙羅王といふ王様の子でありまして、この頻婆沙羅王といふ王様は韋提希夫人といふ夫人がございましたが、この夫婦共に熱心なる佛敎の歸依者であります。お釋迦様に深く歸依致して、佛敎の弘まる爲に力を盡して居つたのであります。その子供が阿闍世です。その阿闍世は提婆達多といふ佛敎に敵をなす者に誘惑されて、さうしてなんでも佛敎の害をするといふことを

りませう。自分達が佛様の敎を伺ひまして、兎にも角にも淺ましい凡夫の境界を離れることが出来たのであります。佛様の恩の廣大無邊なることは深く感激して居る。この佛恩に感ずるにつけても、斯ういふやうな有難い敎を自分達だけが伺つたのでは濟まないから、それを世の中に弘めて、さうして永く後の世までもこの敎に依つて救はれるやうにした。といふことを考へたのは無理もないことであらう。併しその事を思ひ切つて主張したのは迦葉といふお弟子であつたのであります。そのことは前にもお話を申上げたことがあるのであります。佛弟子といふものが如何に私の心持を持たずに居たかといふことを考へて見ると實に尊いのであります。お釋迦様が八十の御歳の二月十五日に御入滅になつた時に、この迦葉はそこに居ませんでした。この人は佛敎を弘める爲に外を歩いて居りましたので、その場には居なかつたのであります。お釋迦様御入滅の

時に側についで御介抱をした者の中で殊に先輩であつたのが阿難といふ人でありました、この阿難といふ人は釋迦様の従弟でありまして、年はズツト下であります。随分若い時から釋迦様に御歸依申上げまして、三十五年間も釋迦様の御身のまほりを一日も離れず世話したといふやうな人でありました。この人はマア釋迦様の御入滅の時にそこに集つた者の中では一番の先輩です。だから阿難が萬事指圖して、御葬儀のことでも何でも總てをやるべき筈であつた。ところがその阿難といふ人が非常に優しい人で、モウ實に純な人でありましたから、自分の師と頼つて、而も二十五年間も側でお世話した。釋迦様が亡くなりになつたといふので、モウ悲しくて堪らないのです。それでモウ何も出来な。御葬儀の指圖も出来な。泣き悲しんで居つた。そこへ迦葉が歸つて来た。これは御入滅の次の日ですが、迦葉が釋迦様御入滅の世間の噂を聞

いて急いでやつて来た。やつて来たところが釋尊はモウお亡くなりになつて居つた。ところがまだ御入滅になつた儘で、阿難が泣いて居るから他の者もただ泣いて居るだけで、御葬儀をどうするのだから、他の事は一向決つて居ない。そこで迦葉は阿難に向つて叱言を言つたのです。「一體何をして居るのか。お前は今ここに居る者の中では一番の先輩ではないか。お前がいくら悲しいからといつて泣いてグズグズして居てどうなるのだ。一體釋尊が御入滅の時に、キツト我々共全體の弟子に對して御遺言があつた筈なんだが、その御遺言はお前そこで聴いて居るだらう、聴いて居ることを吾々に傳へてくれるのが當り前なのに、それをしないで泣いて居るがどうした」と言つて、迦葉だつて自分の長い間の師に別れたので悲しいことは萬々でありますけれども、これを我慢して阿難に尋ねたのです。ところが阿難はなんともしない。餘りドウモ師に別れた悲しみが深

かつたものですから、たゞさめ／＼と泣いて居るだけでありまして、何も言へないのです。そこで迦葉が「ドウモ、お前は何も言つてくれないが、釋尊の御入滅の時に何も仰しやらない筈はない。察すると此の釋尊は自分の今まで説いて居つたところの教を世の中に弘めて、世の中の一切の人を救ひさへすれば宜しい。これが後に残つた者の責任であるといふことを仰しやつたらうと思ふがどうか」斯う言つて訊いた。さうすると阿難が「その通りだ」と言ふので、「ソレその通りではないか、自分は此處に居ないでも不斷から佛様のお心持をよく知つて居る。佛様の御遺言は自分の教を永く後の世に傳へるといふこととでなければならぬと思つて来たのだが、やはりその通りだらう。徒にこれは泣き悲しんで居る時ではない。悲しいのはお互に悲しいのだが、たゞ悲しんで居ても仕様がな。釋迦様の御生前の御恩に報ゆる爲にはこの教を徧く世に傳へるより外はな

らう」と申しまして、それで阿難も初めて成程と思つたのであります。それからそれでは釋迦様の御生前にお説きになりました教を一つ纏めて後の世に傳へるといふことをなんとか計畫をしよう。それにどうしたら宜いかと、迦葉や阿難や、マア有力な幾人かが相談をして見ると、何にしても佛様のお説きになつたことを後の世に傳へるといふのだから、若し間違へて傳へたのでは申譯がない。まるで間違つたことを傳へるのなら寧ろ傳へない方が宜いのであつて、間違へて傳へては申譯がありません。併し長い間も釋迦様の教を伺つて居るけれども、何分にも凡夫であつて、佛様とは段が違ふのであるから、ヒョットしたら自分達の伺つたことの中に間違もあるであらう。又お互に聞き漏らしたこともあるであらうから、これを一つお互に話合つて、出来るだけこれを完全なものにするといふことが何よりの急務でなければならぬ、斯ういふことを迦葉や阿難が相

談して、マア皆の意見が一致を致しました。そこで
お釋迦様の教といふものは中印度、ヒマラヤ山の南
の方の中印度にズット弘まつたものでありまして、
申印度には到る處にお釋迦様の教を受けた者が居り
ますから、斯ういふものを一つ所に呼び集めて、皆
でお釋迦様の御生前に伺つたことを話合つて、さう
して「お前の聞いたことは一部分だ、その一部分は
自分が覚えて居るとか」「こつちの習つたことは足り
ない、その足りない所はこつちの人が聽いて居る」
とかいふ風に、互に伺つたことを語り合つて、さう
して出来るだけこれを完全なものに纏めて後世に傳
へる準備をしようといふことになつたのであります
す。それが結集といふことであります。前にも一度
申上げましたと思ひますが、この時にお經を拵へた
ものではありませんが、そんなことを間違へて傳へて
居ますが、それは間違つて居ります。お經はズット
後で出来たのであります。第一回の結集といふもの

生活、印度のお寺の生活といふものは物を一切貯へ
ない生活です。今日そこら歩いて人の門へ立つて
物を乞ふて、さうして貰つた物で明日一日の食事を
支へるだけの物を取つて置いて、後の餘つたものは
近邊の困つて居る者に施してしまふといふのが昔の
佛弟子の生活であります。寶物を貯へて居るとか、
金を貯へて居るとか、地主になるとかといふやうな、
この頃のお寺のやうなことはない。でありますから
斯ういふことになるのであります。折角結集を思ひ
立つても費用を負担してやるといふことが出来な
い。そこで今の阿闍世といふ人が、以前にはドウモ
佛敎の世に弘まるのに對して害を爲したけれども、
今は全く心を改めて佛敎の保護者となつて居るのだ
から、それで迦葉が阿闍世といふ王様に頼んで、今
回結集といふことをやりたいと思ふが、それをする
費用がないから一つ負担して貰ひたいといふことを
申したのであります。阿闍世も大變に喜んで、さう

は、お釋迦様の御入滅になつた次の年に實行された
のですが、兎に角皆が集つて纏めるのです。皆がそ
れぞれ不完全に一部分だけしか聽いて居ないのだから、
要するに佛様の仰しやつたことは斯ういふのだ
と大體纏めようといふのであります。これは非常に
大事なことでありますして、結集といふのであります。
その時にマアなにしろ中天竺の各地に佛の教を受け
た者が散らばつて居るのでありますから、これを一
つ所に呼び集めることすら容易ではない。又その大
勢の者が集つても互に伺つたことを語り合ふといふ
ことになれば、二日や三日では済まない。一月も二
月も掛るのでありますから、その間斯ういふ者が滞在して
居る費用といふものは夥しいものです。そのいろ
いろな人を集めたり、滞在せしめる費用を負担する
者がなければとてもこの事は行はれない。然るに佛
弟子といふものは今と違ひまして、その時分に於て
は物を貯へることを許されないのであります。昔のお寺の

いふ所に後立てば結構だといふ譯で、阿闍世王
が一切の經費を負担致しまして、さうしてお釋迦様
の御入滅になつた一年後に大勢の人を集めて所謂結
集といふ、お釋迦様の教を纏める大事業を始めたの
であります。これはこの時だけではありませんが、
この時に始めたのであります。

そこでこの阿闍世王といふのは懺悔といふことの
模範の方だつたと言はれて居ります。懺悔といふ
ことは、これも今までも度々申したことであります
が、懺悔をするといふことは今まで自分のやつた事
が悪かつたと思つて佛様の前に行つて謝るといふや
うな簡単なことではない。懺悔といふことは今まで
自分の生活が間違つて居つたといふことを自ら認
めて、さうしてこれよりも新しい違つた生活に入り
たいといふことを誓ふのであります。それが懺悔な
のであります。宗教を弘める人は自分の宗派を繁昌
させようといふやうな私の心持があるものだから

ら、懺悔といふことを間違へてわざ／＼説いて「ナ
 一ニ此寺へ来て御免なさいと謝つてしまへば罪が消
 えてしまふのだ」といふことを言ふが、佛敎の經典
 にはさういふやうなことは説いてない。佛敎の經典
 には善い行ひをして今までの悪い行ひを償ふのが懺
 悔だと教へられて居ります。固より佛敎に於ては因
 果の關係といふものは少しも狂はないものと教へら
 れて居るのであります。その因果の關係が狂はない
 以上は、自分が悪い事をして居たのを、御免なさい
 と言つて、その結果を消してしまふことは許さるべ
 き筈がない。だから悪い事をしたならば善い事を以
 てこれを償はねばならぬといふことは無論の話であ
 ります。そこをシツカリしなければいかん。誰も自
 分の代りに自分の罪を償つてくれる者はないので、
 自分の罪は自分で償ふより外はないのであります。
 日蓮上人もそのことをいろ／＼な所で屢々仰しやつ
 て居られます。自分が迫害を受けるのは、前の世に

作つた罪を償ふのであるといふことを言はれて居る
 のであります。日蓮上人程の方でもさういふことを
 言はれるのです。況んや吾々は凡夫でありますから
 いろ／＼間違つた事をやつて居るでせうから、その
 間違つた事を懺悔するといふことは、たゞ御免なさ
 いと言つては濟まない。善い事を以てこれを償はな
 ければならない。それでありますから阿闍世王が長
 い間提婆達多に迷はされて佛敎の邪魔をしたが、晩
 年に至つてその罪を感じて佛敎の保護をした。殊に
 佛様の亡き後に於て結集をしてこの教を永く傳へる
 といふことに至つて、あらゆる費用を惜まずこれを
 負擔して佛敎の保護者になつたといふことは、懺悔
 のお手本である。かくあつてこそ懺悔の甲斐がある
 のだといふことを言はれて居るのであります。吾吾
 もドウモ考へて見るに、始終罪を作つて居るのだけ
 ら、何か善い事をして懺悔の實を挙げなければなる
 まいかと思ふのであります。なか／＼自分達にはそ

の力はありませんけれども、この阿闍世といふ名前
 を見るとそのことが思ひ出されるのであります。

世の中が安らかに暮せるだらうといふやうな考へでそ
 こに集つて居るのである、さうして眷屬となつて居
 るのであります。これはまるで間違でありますが、
 斯ういふことを申して阿闍世王に話したのでありま
 す。それから又その釋迦といふ者は、まことにドウ
 モ本當の行ひも出来ないものであるのだけれども、
 間違つたことを言つて世の中の人を惑はして、さう
 して迦葉とか、舍利弗とか、目犍連とかいふやうな
 優れた者を弟子にして居る。これは釋迦が人を惑は
 す力があつたからだ。呪術が上手であつたから斯う
 いふやうな者を自分の弟子にして居るのであるとい
 ふことを申しまして、この提婆達多の二門が阿闍世
 王に對して、お釋迦様その他を讒言をしたといふこ
 とが涅槃經の中に書いてあるのであります。

そこでその阿闍世王といふ方は後に至つてはさう
 いふ偉い人でありましたが、初めは婆羅門の所謂提
 婆達多一派の者に迷はされて居りました。その時の
 ことを今この涅槃經の中に言つて居るのであります。爾時
 に多く無量の「外道」即ち婆羅門があつて、皆心を
 合せて共に摩訶陀國の王の阿闍世王の所に行つて佛
 敎の悪口を言つたといふのです。今一人こゝに惡人
 が居る。この「瞿曇」といふのはお釋迦様の俗の名
 です、お釋迦様の姓です。日本で言ふ藤原とか、清
 原とか、平とか、源とかいふのに當るのでありま
 す。それでこの瞿曇といふ姓を持つて居る所の沙門
 が居つて、つまりお釋迦様のことであります。これがドウ
 モ世を惑はすやうな教を説いて居る。さうして一切
 世間の惡人がこの釋迦といふものの弟子になつて、
 それと一緒に居れば利益も得られるし、この

大槪人間は自分の心持をそのまゝに言ふもので
 す。自分が慾張つて居れば他の人を見て「あいつは
 何か欲しさうな顔をして居る」などと言ふのであり

ます。自分が腹を立て、居ると他の人を見て「ドウモあいつは變な面をして居る、なにか怒つて居るのだらう」と言ふのであります。さういふ風に人の批評といふものは實は自分を現して居るものです。これはいつの場合でもさうなんです。だから自分が利益が欲しいと思つて居ると「ハハアあいつ盛んに教を説いて居るが、なにか金を儲けたいのだから」よく斯ういふことを言ふものであります。よくその人情を表して居ります。そこで阿闍世王の所にその一味の者が行つて、釋迦はなにか利益が欲しいと思つてやつて居るのだが、又口先がうまくて大勢の人間が騙される。だから迦葉とか、舍利弗とか、目犍連とかが集まつたのだ。斯ういふことを言つて居るといふのが涅槃經の中にあるのであつて、昔からの通りである。正しい教を説く者に對しては迫害が來るといふことはこれは免れないことである。

天台云く、何に況んや未來をや、理化し難きに在り等云云。妙樂云く、障未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名く等云云。南三・北七の十師、漢土無量の學者、天台を怨敵とす。得一云く、咄哉智公、汝は是誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を謗す等云云。

そこで天台大師がそのことを説明されて、これは「法華文句」といふ書物の中にある言葉であります。「何に況んや未來をや」——「何に況んや」といふのは、如來の現在にすら敵が多いといふその言葉を説明して、釋迦様が生きて居らつしやる時でさへも正しい事を世に説けば敵が多いのであるから、まして未來の、釋尊の時より末の時代になれば餘計に迫害が來る。正しい教を弘めて世の中の迫害を受

けるといふことはドウモ已むを得ない。「理化し難きに在り」如何に正しい道理を説いても、その道理を説いて大勢の人間を心から教化するといふことは容易ではないから、そこで迫害が初めから來るといふことも已むを得ないのだといふことを、天台大師が説明して居られる。實際その通りである。

それから又唐の妙樂大師が、今の天台の書いた法華文句を説明した書物で「文句記」といふものを作つて居りますが、その中に今の天台の言つた言葉を更に詳しく説明致しまして「障未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名く」と言つて居ります。これは實に適切な言葉です。前に引きました經文の中に「如來の現在にすら猶怨嫉多し」況して後の世は尙ほ更だと言つてある、その「怨嫉」といふことの説明をしたのです。「怨」といふのはどういふことか、正しい者を敵とするといふのはどういふ譯で敵とするかといへば「障未だ除かざる者」

である。「障」といふのは迷ひで、自分の心に迷ひが無くならない間は、正しい者を敵とするといふ心持になるのは已むを得ない。これは實に徹底した言葉です。自分の分別が足りないから物の善い惡いが本當に判らない。本當に判らないから善い者を憎んだり、正しい者を排斥したりする。要するに心が晦んで居つて智慧が足りないからだといふことになりませう。今の世の中を見ても皆さうです。正しい人を敵と爲すことは障未だ除かざる者です。なんだか心の中に迷ひの固まりがあつて除かれないから、なんだか知らんが、喧嘩しないでよい事を喧嘩して見たり、執著しないでもいゝ事に執著して見たり、敵とする値打のない者を敵としたりする、それはみな障未だ除かざる者であります。これは全くよく言ひ表してあります。さうして他の怨みを受けるやうになる。それから又「聞くことを喜ばざる者を嫉と名く、これも良い言葉です。自分より勝れた人の教を

聴いて自分が善くなりたいたいと思つたら、人を嫉んだり、憎んだりすることは無いが、聴くことを喜ばないで『モウ自分はこれで澤山だ』と言つてそれ以上に進歩することを喜ばないから、なんだか他の者を邪魔にする。自分より偉い者が出さうだとこれを邪魔にするといふことになつて来る。自分がどこまで進歩しようといふ心持があるならば、自分より偉い者があつてもチツトモ憎んだり、嫉んだりすることは無い筈なのであります。ですからこれも良い言葉です。聴くことを喜ばない者です。世間であいづは憎いの、忌々しいのと言つて居る人は大概聴くことを喜ばない人です。自分の小さい所に固まつて、他の人の教を聴くことを喜ばない。これが即ち世間を敵にして居るのであります。この妙樂の言葉は如何にも今の世にも適切であると思はれます。

しても一致しない。何故かといふと法相宗ではこの前に申すやうに『三乘眞實、一乘方便』といふことを言ひます。『三乘』といふのは聲聞、緣覺、菩薩の三つが『眞實』で、それが本當なのだ。人間生れつきに皆佛に成るとは決らない。聲聞といふ位で行き止りの者もあれば、緣覺で行き止るとか、中には菩薩になる者もある。人間の性質で皆違ふ。『一乘』で皆佛に成るといふのは『方便』だ。皆奮發して偉く成れと言はなければ勉強しないから、皆が偉く成れるといふことをお釋迦様が仰しやつたので、それは方便であるといふのであります。だから法華經の中の、一切衆生悉く佛に成れるといふ説とは兩立しないのであります。だから法相宗としては天台とか、妙樂とか、傳教とかいふ者をあくまで排斥しなければならぬといふことは、不思議はありません。今でも法相宗の人はよくさういふ考で居るやうです。尤も今は繁昌して居りません、少しお寺がある

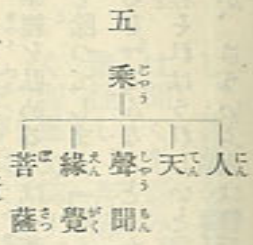
北の方には七つの派が對立して居りまして、これより南・北七と申しました、つまり十派の佛教があつたのであります。さういふ者や、それからその他マア支那のいろ／＼な行者達が天台大師を敵として居る。これは今の自分達の心が分別が足りないから、それで天台大師を敵として居る。天台がなんだか邪魔で仕様がな。天台の教のやうなものが世の中で繁昌すれば自分達の立場が失はれると思ふから、それで天台大師を敵として居るのであつて、天台に對していろ／＼勝手なことを言つて居るので

す。それでその時代の例を言へば『得一云く』得一といふのは、これは日本の人でありまして、法相宗の行者であります。法相宗といふものと、法華經を中心とした天台の教といふのはどうしても兩立しないのです。これは各派に依つて一致しない點はありますが、就中法相宗と、法華を中心とする派とはどう

にはありますが、さういふ法相宗の人などの話を聞くと、『私はマア聲聞で終ひでせうナ』といふやうなことを言つて済まして居ます。さういふやうな教義なのです。これは法華經のやうに一切の人が皆佛に成るといふことは兩立しません。そこで法相宗の學者であるところの得一といふ人が天台大師の悪口を言つて居る。『咄哉智公』咄い智公といふのであるから、あの天台大師といふ者はつまらない人だ、お前は誰の弟子なんだ。一體教を受けた所は誰なんだ。お前は誰から習つたか知らんけれども、凡夫ではないか、三寸に足りない舌を揮つて佛の教を説いて居ると言つたつて、佛の舌は梵天まで届くと言はれて居るのだ。勝手に解釋して佛の御本意に背いたやうなことを言ふのは怪しからんことだと言つて天台の悪口を言つて居る。これはマア悪口の一つの例であります。

東春に云く、問ふ在世の時許多の怨嫉あり。佛滅度の後、此經を説く時、何が故ぞ亦留難多きや。答へて云く、俗に良藥口に苦しと言ふが如く、此經は五乗の異執を廢して一極の玄宗を立つ。

それから又「東春」といふ書物に言つてある、一體この東春といふのは、場所の名前なのであります。唐の妙樂大師の弟子に智度といふ人が居りました、この智度といふ人が東春といふ所に居つたのであります。それでこの智度の書いた書物を「東春に云く」と書いてあるのであります。妙樂大師といふ人は、唐の時代に出て法華經を弘める爲に非常に努力した人でありました。隨て妙樂の弟子である所の智度といふ人の言つたことは、法華經を信ずる者に取つては大いに参考になるべきことが多いのであります。その智度の言つた言葉の中に、問答を假に設



を言ひます。「人」といふのは普通の人間、別に佛の教に深く歸依しないで、マア人間として當り前の世の中を送つて居る者。「天」といふのは、人間の苦しみや悩みを離れて安らかな心持に居る者。「聲聞」といふのは前に申上げたやうに佛の教を聽いて世の中の無常を感じ得た者。「緣覺」といふのは佛の教を聽くと共に、自分の日常の會ふ出來事と思ひ合せて世の中の無常を感じて居る者。「菩薩」といふのは、佛の大乗の教を修行して慈悲を以て一切の人を教へ導かうといふ願を立てた者。これはマア段階がいろ／＼あるのであります。その五つのはそれ／＼違ふのであります、その違ふといふこ

けまして、後の世に法華經を弘める爲に力を盡す人の決心をよく説いて居る。その中に先づ問を設けて「在世の時許多の怨嫉あり」お釋迦様の生きて居らつしやる時にも、法華經を弘めるのに對して随分いろ／＼な敵になる者があつた。それから「佛滅度の後」即ちお釋迦様が亡くなられて後にこの經を説けば、いろ／＼敵が多いといふことはどういふ譯であらうといふ問を設けました。「留難」難を留めるといふのは、佛の正しい教を引留めて邪魔をするといふ意味であります、つまり迫害であります。迫害が何故多いかといふ問を設けました。「答へて云く、俗に良藥口に苦し」とそれはよく世間で言ふ「良藥は口に苦し」と同じで、なか／＼眞實の教が大勢の人に本當に弘まるものではない。「此經」即ち法華經に於ては「五乗の異執を廢して一極の玄宗を立つ」——「五乗」といふのは、

とをこの經の中では捨てて、假令人間であつても、天上界の者であつても、聲聞であつても、緣覺であつても、菩薩であつても大乘の教を學ばなければならぬ。さうして大乘の教を學んで大慈悲の行ひをするといふ決心をして、佛様を根本として修業して行けば、結局は皆佛の境界に到達が出来るのだといふことを説かれたのです。これが「一極」です。一極といふのは極點です。佛の極點、その極點に至るべき所の最も奥深い宗旨を立てたのだ。それだからさういふ教は、今までのお釋迦様のお説きになつたいろ／＼なお經の中の説とは違ふことがあるのである。それで法華經以外の教を信じて居る者はこれを不思議に思つて、これはドウモ佛様の本當の教ではなからうといふやうな疑を起して、却て法華經を弘める者を迫害するといふやうにもなるのであります。

これは今までも度々申し上げましたが、この際尙

ほ注意して置きたいと思ふのは、これらの人、天、
聲聞、縁覺、菩薩といふやうなものが皆佛に成ると
言はれるのには條件は無論あるのです。たゞイキナ
リ皆が佛に成るといふやうな大難把な言ひ方をして
は居ない。「菩薩の行を勵んで」といふ條件がある、
それを忘れてはいけない。菩薩の行を勵まなければ、
本當の大乗の教を學んで大慈悲を以て一切の人に
接するといふ修行を續けなければ、到底佛の境
界に到達するものではありません。菩薩の行を勵め
ば、現在に人間界でも、或は聲聞、縁覺でも、結局
は佛に成るのだといふことを説かれて居るのです。
ところが惡口を言ふやうですが、後の世になつて法
華經を弘める人は「菩薩の行を勵んで」といふこと
を除つてしまふ「なんでも構はん、おきに佛に成れ
るぞ」こんなことばかり言つて居るものだから、成
程それはうれしと言つて寄り附く人が多いだらう
が、さういふ人は修行が足りないから佛に成れない

し、菩薩を挫して新學と爲す。故に天魔
は聞くを惡み、外道は耳に逆ひ、二乗は
驚怪し、菩薩は怯行す。此の如きの徒悉
く留難を爲す。多怨嫉の言豈に唐しから
んや、等云云。

「故に凡を斥け聖を呵し、大を排ひ小を破り」と
いふのですから、凡夫は無論いけない。煩惱に捉は
れて居る者は「それではいけないぞ」と言つて凡夫
を斥ける「聖」といふのは佛の教を學んで、世間に
執はれないだけの境界になつたことを言ふのであり
ますが、その聖もいけない。自分が世間に執はれな
いだけではまだ本當ではない。一切の人を救ふだけ
の徳を具へなければ本當ではないのですから、世間
からあの人は清らかな行ひをして居ると言はれる者
でもまだ足りない。これが「聖を呵し」で、まだそ
れはいけないといふのです。それから「大を排ひ小

でせう。その所は餘程考なければならぬことで
す。凡夫が佛に成るといふこの大きな事がそんなに
手軽に出来るものではないので、難行、苦行の數を
重ね、菩薩の行を重ねて行つて勵んでこそ、佛の
境界に達することが出来るのでせう。そこを間違へ
ないやうにしなければいけないのであります。併し
いくら骨が折れるとしても、骨折つて行きさへすれ
ば、結局佛の境界に到達が出来るといふことを教
へられるのでありますから、そこでこれは今まであ
りましたいろ／＼な經に説かれた所と違ふので、そ
れでいろ／＼と惱みが多い譯であります。それを教
へるに付ては敵が多いといふことは已むを得ませ
ぬ。それが「一極の玄宗を立つ」であります。

故に凡を斥け聖を呵し、大を排ひ小を破
り、天魔を銘して毒蟲と爲し、外道を説
いて惡鬼と爲し、執小を貶して貧賤と爲

を破り」普通佛教に於ては大乗、小乗といふ區別が
あるけれども、大乘といつてもまだ一切の人間が佛
に成るといふ所まで説かないのは方便だから、まだ
それは本當ではない。小乗は無論です。だから大乘
も小乗の教もまだ／＼本當のことを言はないぞと、
斯う言ふ。さうして斯ういふやうな低い教に執著し
て、進んで高い教を求めない者は天魔である、惡鬼
であるといふくらゐに言つて居る。それから又「外
道を説いて惡鬼と爲す」無論それはさうでせう。「外
道」即ち佛教以外の教で以て満足して居る者は、佛
教の敵を爲す者である。それから「執小を貶して貧
賤と爲し」——「執小」といふ言葉は非常に善い言
葉です。小さい所に執著する。佛の教は小さい所か
ら大きい所までズツと續いてあるのだけれども、そ
の小さい所で、「モウこの邊で判つた」と思つてし
まふ、これが執小です。吾々共も動ともすれば執小
になり易いのであります。誰でも一通り判つて來る

とモウ判つたと思ふ。それ以上に進んでモット求めるといふことをしないやうです。このことはお經の中によく戒めてあるのです。そんなことではいけない。判つたといつてもまだ判つて居るのではない。まだ本當に判つて居ないのだといふことを戒めてあります。だから執小を貶して貧しい者だ、お前の心は貧しいのだ、自分の心がまだ足りない所があるから小さい所で満足して居るのだといふことになる。これは法華經の信解品の中に、御存じのやうに長者とその長者の息子が諸國に流浪した譬を説いて、その息子は千萬長者の子であるけれども、親の家を離れて諸國を流浪して毎日々々その日の生活を立てまして、それで足れりとして居つたといふのです。これは實に痛切な教です。今日の生活、その一日の生活をすごして足れりとして居るのでは、何をしに人間に生れたのか判らない。それでは生れない方がズットいい。生きる心配がなくていいでせう。それを

言つて居るのです。今日一日を無事に暮せれば澤山だと思つて居るのは、實に心の低い者だ。それが親の長者の後を繼いで巨萬の富を受継いだといふことは、一切の人を救ふやうになつたといふことを意味するのであります。今日の一日を暮して満足して居るといふこの短い言葉は、實に一切の人に對する痛切なる批評だと思ふのです。大概の人は今日の一日を無事に暮せば、それで宜いと思つて居る。今日の一日を無事に送つて五十年、六十年と經つて死んでしまつて差引きプラスマイナス・イコール・ゼロであれば、世の中を塞いで居るだけつまらないことです。それなら寧ろ生れて來ない方が餘程いいといふことになる。だからこれはつまらない。さういふことは深く考へなければならぬことであります。人間として世の中に生れて、生れた甲斐のある事をしないで、マア無事に済んだからそれで宜いといふことではいけないのであります。

貝原益軒がそのことを言つて居ります。これは佛教の方ではないけれども、普通の人は病氣をすると醫者に掛る。さうしてその病氣が癒つてお祝をする。さうしてお祝をした翌日から又病氣になつて、又醫者に掛つて、どうやら癒つて、快くなつたからといつて又お祝をして居る。それで病氣になつて薬を呑んで癒つて祝つて、又病氣になつて薬を呑んでやつと癒つて祝つて……その内に死んでしまつたら、その人は何しに生れたか判らない。世の中の人のやつて居る事は多くはこの類だといふことを言つて居りますが、洵にその通りです。病氣をしてそれが癒つて後始末が出来ると、マアよかつたと言つてお祝をして、又やり直して、その後始末が出来ると又お祝をする。幾度も繰返す内に頭が禿げて死んでしまへば、それは何にもならんでせう。これは生に安んずるといふことで、これは佛教以外のことでよく思ひ當ることでありませう。法華經に於ては

それではいかんと言つて教へられて居る。苟も人間として生れた以上は、生れた甲斐のある事をしなければならぬ。佛の化導を助けて、一切衆生を救ふ爲に力を盡すことにくらかお役に立つことをしなければならぬ、斯ういふことを言つて居るのであります。それで小さいことに執着することを貶して貧賤となす。それから「菩薩を挫して新學と爲す」菩薩がいくら徳があつても、佛に成らない間はまた新學である。新學とは初歩の者です。だから初歩の者と思へといふことです。この新學といふのは、まだまだ自分が人を救つて居るといつても佛様に比べれば物の數ではないから、まだ新學だ、この頃新しく大乘の修行をし始めたのだと思はなければいかんと言つて居られるのであります。それだから天魔は聞くを厭ふのです。そんな教は嫌やだと言ひ、それから「外道は耳に逆ひ、二乗は驚怪し、菩薩は怯行す」二乗

といふのは聲聞、緣覺です。それらも驚き怪しみ、菩薩も、ドウモそんなむづかしいことでは、自分達は出来るだらうかと言つて疑惑の心持を起す。「此の如きの徒悉く留難を爲す」さういふ者が法華經を弘めるのに對して妨げをして、こんな恐ろしい教が弘まつた日には自分達の立場がなくなつてしまふといふので、皆が妨げをする。それで「猶怨嫉多し」とお經の中に言つてあることは「豈唐しからんや」で、尤もなことである。實際世の中はさういふものであらうといふことを言つて居るのであります。これは今の智度といふ人が言つて居るのであります。

顯戒論に云く、僧統奏して曰く、西夏に鬼辯婆羅門あり。東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。此乃ち物類冥召して世間を誑惑す等云云。論じて曰く、昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。實な

るかな法華の何況や等云云。

前のは支那の例でありましたが、今度は日本に移つて言ふと、傳教大師が書かれました顯戒論といふものがあります。これは奈良の六宗の坊さんが傳教大師を嫉みまして、傳教大師に對して攻撃するやうな意味で朝廷に上書を致しました。その上書に對して辯駁をされたものがこの顯戒論であります。「戒を顯はす」戒といふのは佛の御本意といふ意味で、佛の御本意を守るとはどんなものかといふことをよく顯はしたのであります。その中に南都六宗の者が傳教大師に對していろ／＼謔言を試みたと言つて居ります。その中に「僧統奏して曰く」僧統といふのは奈良の坊さんの取締をする者、統といふのは取締をする者です。即ち奈良の諸宗の上に立つて皆を統一して行くやうな意味で僧統といふのであります。取締をする人であります。その僧統が朝廷に奏して

言ふには「西夏に鬼辯婆羅門あり」印度に鬼辯婆羅門といふものがあつて、これは婆羅門教の者で佛敎の妨げをした者がある。それと同じように東の國の日本に、巧みに言葉弄して正しい佛敎を妨げる所の傳教大師、即ち最澄といふ者がある。「禿頭沙門あり」といふのは、頭を剃つただけで實行のこれに伴はない者といふ意味です。頭だけは剃つて居るけれども、心はドウモ淺はかであつて、佛の御精神に副はないものである。この者がいろ／＼世の中を迷はして行くといふと、他の者もこれに隨つて来る。「物類冥召して」といふのは、それに迷はされて大勢の者が自然々々に集つて来て、傳教大師が何か言ふと御尤もだとばかり集つて来て、さうしてそれが世間を惑はして困るといふことを申して、南都の諸宗の方から傳教大師の惡口を言つて居る。それに對して傳教大師が辯駁して議論して居られるには、ドウモ自分が間違つて居るといふと、自分の淺はかな心持

を以て他の者が間違つて居るといふ風に引下して言ふのは世の中の常である。昔は支那の齊といふ時代に光統といふ者があつて、自分の考を恣に主張して正しい佛敎の妨げをしたといふことを聞いて居るのであるが、今日日本に於て南都六宗の者の頭に立つ者が皆法華經の妨げをする。いろ／＼な出鱈目なことを朝廷に申上げて居る。これは洵に尤もなことである。法華經の中に、如來の現在に於てすら迫害が多いのだ、だから未來に於ては猶更だであることが思ひ當るといふことを傳教大師が言つて居られる。昔から正しい教を説きますれば、これに對して迫害が來るといふことは、これは洵に免れ難いことである。それであるから日蓮が正しい教を弘めて迫害を受けるといふことは今更のことでないといふことを覺悟して居るといふことであります。

秀句に云く、代を語れば即ち像の終り末

の始め、地を尋ねれば即ち唐の東翔の西、人を原れば即ち五濁の生鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉况滅度後。此言良に以あるなり等云云。

「秀句に云く」といふのは、傳教大師のお書きになりました法華秀句といふものでありまして、それに「代を語れば即ち像の終り末の始め」とある。法華經の世の中に弘まるべき時は何時であるか。その時代を言へば、像法の世、即ち佛滅後二千年過ぎた後の終り、さうして末法、即ち佛滅後二千年過ぎて後の五百年、この末法の世に至つて法華經が世の中に弘まるのである。又その弘まる土地を考へて見れば、支那の東の方で羯の西の方である、羯といふのはよく判りませんが、揚子江の近邊全體を言つたさうであります。つまり「唐の東羯の西」といふことは大體日本といふことになる。土地は日本が中心と

ります。このことは他の御書の中にも屢々あることです。丁度佐渡に流されて御自身が罪人の境界に居られる時に、鎌倉や方々に残された弟子が世間から疑惑を以て見られて居るといふ最中にこの言葉を言はれたのは尊いことであります。今更驚くには及ばない。この所を越えて行かなければ本當に法華經の弘まる時は來ないのだからといふことであります。吾吾でも先を見ることが非常に大事だと思ふのです。今こゝを歩いて居る時に、この先何處へ行つたら右へ曲る道があるかとか、左へ曲る道があるかといふことを見なければならぬ。凡夫は自分の今居る所ばかりを見て居る。今安樂だからといつて、決してそれがチツトモ頼りにならない。今苦しいといつても、その苦しいといふことは未來までも續くものではない。だからいつでも先のことを言つて居るのである。今は苦しい、苦しいが併し先に行けばこの教が弘まるのだ。その教の弘まる時機を作

なつて弘まるだらう。その時代に生れた人はどんな人であるかといへば「五濁」といつて心が濁つて煩惱に満された時代である。さうして「鬪諍の時」お互に争ひ合つて、自分を主にして勢力を争つたり、地位を争つたり。利益を争つたりして絶間のない時代である。この時に法華經が弘まるのである。それはお經の中に「如來の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と言つてあるが、その言葉は洵に道理がある。斯う傳教大師も言つて居られる。

それでこれらのいろ／＼な言葉を思合せて見るといふと、今日達が法華經を弘めるに當つて、あらゆる迫害が一身に集るといふことは今更始まつたことではない。お經を始めとして代々の先師の説明の中にもこのことは豫め説いてある。迫害が加はれば加はる程自分は法華經の行者として世の中に生れた者であるといふ自信が強まるだけの話であつて、今更驚くべきことではないといふ意味に取れるのである。今こゝで苦しまなければ、さうしてこれを通り抜けなければ教は弘まるものではないといふことをいつても言つて居られるのであります。これは宗教上のことばかりでなく、何事にもこの決心がなければならぬ。苦しいことによつたつたら、これを越えれば安樂の天地が開けると、斯う思はなければならぬのであります。この事はあらゆる場合に當てられるいゝ教訓であらうと思ふのであります。それで先づお經や何かのことを大體引かれました、さうして今迫害に遭ふといふことを恐れてはならぬといふ教訓を與へられたのであります。これから更に世間的の事を引きまして、尙ほこの意を強くされることになるのであります。

それでチヨツト今こゝには直接の関係はありませんが、この際申して置きたいのは、日蓮上人がさういふやうに自分は正しい事を弘めて迫害を受けるのだから、世間が間違つて居る、自分が正しい、斯う

いふことを主張されるのです。これは無論その自信がなければならぬ譯ですが、それだけ一本調子で押して行けば、成程日蓮上人のやうに偉い方なら宜しいが、他の者が「俺は正しいのだ、世間が間違つて居るのだ」などと言へば、所謂逆上者になつてしまふ。ところが日蓮上人はそれで押通しては居ないので、一方から言へば、自分が正しくて世間が間違つて居るから死んでも少しも恥しくないと言つて居られるが、又一方に於ては、自分が正しい事を主張しながら苦しいのは、前の世に作つた罪を償ふことになるのだといふ風に、自分を責めることになる。この二つが上人にはあるのです。これは忘れてはならないことです。いつでも決して自分だけ偉いと言つては居ないのです。「俺は正しい、世間は間違つて居る」と言へば非常に自分を高く見ることになる。しかし「斯様に正しい事を言ひながら迫害を受ける」といふことは、餘程前の世の罪が深かつたのだ

らう。前の世からの罪であらう、それを償ふにはドナナ苦しみでも甘んじて受けなければならぬ」と言つて、自分を引下げて居られる。そこが偉い所なのです。そこをよく考へなければいかん。後の世になると、「俺は正しいぞ」と言ふ、この方ばかりをやるのです。だから逆上者が餘計出来て、自分を反省するといふことが殆どなくなつて来るのであります。上人の御書を讀む者はこの兩方面を讀まなければならぬのであります。一面に於ては、法華經の行者は自ら梵天帝釋をも恐ろしいとは思はんといふ意氣を持つと同時に、一面には前の世の罪があるが爲に、これに依つて罪を償ふのだと自分を引下げるこの兩方面があるのであります。これであつて初めて本當の健全な宗教になるのであります。一面からばかり力説するといふことは宜くない譯であります。今こゝでは正しい事を弘めるといふことを強く言はれて居りますが、だん／＼この御書を讀んで行

きますと後の方に行つて、自分を凡夫として罪を償ふといふ思想が現れて来るのであります。この兩方面がありまして初めて本當の宗教として完全無缺

な尊いものになるといふことを忘れてはならないと思ひます。

(第十六講了)

鈴木上人序
小林先生序
磯部滿事著

佛教の心髓

最新刊
四六版コース上製
特價金壹圓也
送料金九錢

佛教は萬古を通じて人天の一大燈明である。特に現代には公平無私の淨念を持つて之を認識する必要があると思ふ。法華經を知らずしては人生を論じ難い、壽量品を手にはせずしては超人格者を語る資格はない、超人格を拜せざる者は人間でない不知恩の畜生なりと古聖は喝破された。

小林先生曰く「教といふものは宛かも藥のやうなもので、病が非常に重くなつて初めて眞の靈藥の貴さがわかるのである。世の中が今日の如く極度に切迫し、人の心が今日の如くに極度に險惡になつて、初めて壽量品の最も貴いことが音く世の人に理解せらるべきであらう。磯部君が今日に於て此の書を公にせらるゝは最も其の時を得たるものと稱すべきである。……喜んで此の書を江湖に推薦する……」

謹告

四八

来る十一日は本部開館第六周年に相當仕候間左記の通り記念式典舉行且つ時機に鑑み大教化講演を小林一郎先生等に依り相催すべく候に付奮つて御來援願上申候

左記

日時 二月十一日午後二時開場

場所 小石川區音羽町六丁目統一會館

行事 式典、講演、

財團 統一團
法人

◎當日來會者一同へ粗品呈上

宗教の尊嚴

儀部 滿事

現代人は宗教の妙味を嘗めないで、宗教殊に佛教といへば頭から輕視してかゝつてゐるが、一步突き込んで何故に佛教がいけないのかと訊いても確な答へは出來ない。唯消極的だからとか、獨善的だからとか、厭世的だとか、外來思想だとか、種々の難辯を付けやうとして居るが、その根據は何もない、皆がさう言ふて居るとか、非現實的ではないか等と出鱈目を羞かしいとも思はないで、附和雷同せるに過ぎない、一犬虛に吠へ萬犬實を傳ふるの類で、靜かに考へた時にきまりが嚙むるいことであらう。マアどちらかといへば大體が經濟第一義に没頭して、精神的のことは無關心なのである。生活の脅威に懼れて宗教の事などは老後の慰安位にしか考へて居ないのである。随つてこれ程國民の精神總動員が高調せられて居ても、宗教に關しては何等の特典が設けられてない、のみならず佛教に對しては却て排棄の傾向さへある。それは事變戰歿者の葬儀に於て一層露骨化せることを見聞する。最近も臺灣に於て廢佛毀釋的問題が起り、釋迦、觀音祭るべからずといふ文句さへ公表され、人心の動搖憂慮の事態にあるに鑑みても、此際佛教の價値尊嚴を大衆に熟知せしむることが緊急の要事ではないかと思ふ。

昔支那に張商英といふ宰相があつて、始め大に排佛を主張したが、妻君が、「あなた排佛を論ぜらるゝならば、徹底的にその非理の點を擧げ、堂々と天下に御發表なさることが宜しくありませんか」と注意され、ソレだとばかり翻然として佛教研究に着手した。幾年月かの後これ見よと愛妻に示したのは排佛論でなくして、意外にも護法論であつたといふ有名な話があるが、多くの人の佛教批評程淺薄なものはない。古人の篤學にして猶且つさうである。況んや今人の説をやである。大覺釋尊の聖意が、そう簡単に評價さるべきではないでしやう。等しく専門的に數十年の苦修練行を勵んだ僧侶であつて猶ほ且つ釋尊の御精神を掬み盡せなかつた程深遠幽玄なものである。それが隨筆物や小説でも見る氣で經典を誦いても恐らく開卷第一行から難解ではないかと思ふ。それが臆面もなく消極的だ、獨善的だ等といふのは、像末の佛教徒の態度の一面ばかりを見た盲斷で、標的はとんでもない處にあるのである。大國民としてはモト少し慎重に深味を持つて戴きたいものである。ある人達の間に於ては、面倒だから我國には固有の文明がある背で儒教だとか、佛教の如き外國ものは不必要だといふやうなことをいふが、三つ兒のいふ無智暴論である。我國の文化を體系的に研鑽すれば、左様な愚論は出ない。又それは御上に對しても畏れ多い事なんで、大にも互慎み合ふべきことである。

日本精神を論ずる人は、我國史を見る上に體系的といふことを忘れてはなるまい、一部分に偏つた時に頑迷な國學者となり、拜外宗の道學者と脱線するのである。夫等は文化の退歩を促がす者として、この旭日昇天の大帝國には好ましからぬ次第である。さればといつて何でも舶來物を鵜呑みに受け入るのではない、そこに自主的といふことを忘れぬやうにしたい。五箇條の御誓文や御製を拜すれば極めて明かですやう。

〇

經典の中に、釋迦牟尼佛は一つの譬をお説き下さつて居る。

或る貧しい人が、已前からなじみの富める親友を訪づれた。その友達は親切にいろ／＼と御馳走を應饗したので、久し振りに満腹陶醉よい氣分でそこに横になつて一睡した譯である。その時に友達は御用で行かねばならぬ、折角よい氣持で寝てゐる者を起すこともない、併し見れば貧しい生活をしてゐる可愛想だといふので、靜かに寝たまゝの友達の着物の内部へ、とても高價な比類ない寶珠を縫ひ込んで置いたまゝ別れ去つたのでした。

貧しい友達はそんな事には心付かず、不圖目を醒せばモト遅くなつて居り、親友も居ないからして一あくびすると共に其家を左様ならして、不相變彼方此方と轉々しつゝ生活難に困憊あへぎながら彷徨して居たのでした。計らずも一日途上でその親友に再會した。親友はその貧しい友に過ぐる日寄かに與へておいた寶珠の利用に依つて、立派な者になつてゐるだらうと安心してゐたにも拘らず、この姿を見て、「ヤア君どうして居るのだ、この前君の來た時、將來不自由せぬやうにと思つて評價も出來ない程貴い珠を若し落したり失つてはいけないからと鄭重に着物の中に縫ひ込んでおいたが、それをどうした君!」と問ひますと、貧しい友は驚いて、「ソソナ事があつたのですか、私は少しも心

付かなかつた』『よく見たまへ、コレなんだよ、これを活用すれば何でも好むものが得られる、少しも困ることも惱ましいこともない、随分君はボンヤリだよ』……

佛典中の譬へ話しは單なる假空的のものではありませぬ、それは立派な教なんであつて、右の譬に述べられた貧しい人とは、偏狭な薄べらな思想に執はれて居る人をいひ、親しい友とは、本師釋迦牟尼世尊であります。着物に珠を縫ひ込まれたといふことは、その往昔に私共に貴い最高の教を與へられた宿世の結縁であります。而して再びこゝかしこと衍へるは、煩惱に纏はり物質欲を満さうとして或は淺薄な學問を獵つてゐる態度です。途中で再會したのは、今番に世界文化の華と誇つた印度、その淨飯王家に御降誕の釋尊に遇ふことでもあります。而して着物に縫ひ込まれし珠をソレそこにあるではないかと示されたのは、法華經の開顯思想をいふのであります。法華經が開顯の妙教であるといふことは、私共人間の上に於ては、お互に善の方面も惡の方面も具へて有つゐる、その善い方面を誘引して實行に移せしむることであり。佛様の上に於ては、法華經壽量品の始めなき始めよりの本佛釋尊を中心として、諸多の佛や神を顯本するといふことになつて、教義上極めて重要な一句であります。本多上人は、法華經は開顯統一の妙教だと仰せられてゐるので、宜しく讀者の御研鑽を請ふ次第です。それから譬の最後に、その珠を活用せば、生活の安定を獲られるといふことは、法華經の信心に依つて現在生活の安住ばかりでなく、延びては將來の保障も與へらるゝことになり、且つ自分のみ利するに非らずして他をも利益せしむる處の理想的の教であることを辨ふべきであります。斯様に佛敎は空理を弄ぶものでなく、實

現に、私共の日常行動に對する光となり力となり、物心共に満足を與へらるゝものなのであります、故に法華經には、世間の道德上のことも、政治上のことも、經濟上のことも、軍事上のことも、産業上のこと等一切皆この妙教に順據すべきであると説かれて居ります。識者の深思を促したい。

世間の有様を見渡す時に、果して立派な筋道の立つた人生觀を有つて活躍して居らるゝ人が、どれ程ありませうか。毎日の生活に逐はれて人生を虚ふ餘裕もないやうな者の集り、そんな社會がどうして人類の幸福を招致することが出来ませう。人生は苦なりといふ側ばかり見て居る人は、時に世を呪ふことになりませう、人事を盡して天命を俟つといふ考へ方も、立派なやうだが寧ろ責任觀の薄い思想である。そんな事で天業恢弘の大事は實現出来ない。運命だから仕方がない諦ろといふやうな、あきらめ主義が佛敎と思へば大間違である。世間的には博士だとか、學者と威張りつゝ、方角や日の吉凶を氣にして却て自滅した知識階級もある。是等は宗教の尊嚴を知らず、信仰の妙味に觸れないから起つたものといへる、須らく現代人はいろは歌を讀み直すがよろしからう。詳しくは涅槃經にあります。躍進日本に伴ひ、日本を知れといふ聲がする、今頃日本を知れ等とは外へ聞へても羞かしい譯だが、さういふ人が日本人であり、世界人であり、宇宙人であるといふこの人身觀をどう辨へてゐるかと問ふても、満足の答をする人がどれ程あるか、實に心細い次第である。

自分で自分が解らず、それでは社會も解らず、國家も解らない、徒らに食つて寝て五十年といふこと

では、寧ろ生れない方がよかつたのではないでしやうか。處が最も近い自分が自分では解らぬ、恰度眉毛が見えないやうなもので、そこに肅然と襟を正して大聖の高教を仰ぐべきである。自分で坐禪して悟つたといふやうな者は魔衆である。妙教を信ずることに依つて始めて佛智に近づくことが出来る。この恭敬の心給仕の態度を逸しては、遂に佛教は我がものとはならぬでしよう。日蓮聖人は開目抄に仰せられた。支那の三皇五帝三王であつても、老子、孔子等皆巧みに教を立てられてゐるから聖人賢人とはいふものゝ、過去のことが知られないこと恰も我等の背後が見られぬやうに、又將來といふことを鑑みないから盲人の前を見ぬやうなもので、たゞ現在ばかり家を治め孝行して仁義禮智信の五常を行ふ時に、傍輩を敬ひ、名も八方に聞えて立派さうであるが、過去と未來のことが知られないから眞の忠孝にはならず思を知らざる者で、眞の賢聖ではないではないか。と、これ大に味ふべき言葉と思ふ。随つて眞面目に自分といふものを理解しやうと思へば矢張り、孔子の推されたやうに大聖釋尊の明教に據らねば得られないといふことが窺はれる。かうなると自然釋尊とは如何なる方であるかといふ問題が第一義である。多くの人は、釋迦牟尼佛は印度に出現して、少い時から人生問題に悩みを持つて、遂に出家修行の結果大覺を成ぜられた佛様と見て居るでしやう。だからそんな三千年も昔の野蠻時代に生れて悟つたといつても、現代文化の方が遙かに優れて高尚であるから、今時分に佛教なんかは一顧の價値もないではないかと思ふのが、根本的の謬見なであります。

釋迦牟尼佛のことに關して最も明解に宣説された經典が、即ち妙法蓮華經であり、その如來壽量品で

あります。故に苟くも佛教を論議しやうとか、佛陀とは如何といふことに關しては是非如來壽量品を精研せねば、その資格ないものといへるのです。壽量品を知らざる諸宗の學者は不知恩の者なりと、喝破さるゝ所である。而してこの壽量品の釋尊を末代の吾等に完全に光顯して下さる方は、その本化のお弟子である所謂日蓮聖人でなければならぬことが、經文の上に顯かに説き遺されて居るのであります。その日蓮聖人のお言葉によると、壽量品といふ經文は、五千七千等の一切經の中に、此の壽量品は、恰も天の日月のやうに、國の大王のやうに、人の精神のやうなものだとあります。是れ壽量品には佛陀のことと、その御救ひの事柄が説き切つてあるが爲めてこれ宗教の極致である。宗教としての一重要要素がこゝに示されてゐるので、佛教を學ばんとする人の最も力を傾注すべき一章なんである。この壽量品を聞いて法華經から觀世音普門品を引き抜き、觀音經だなどと獨立せしめたりする者があれば、それは佛教徒ではない明かに反逆者なんである。かゝる思想は世間的にも大に警戒せねばなるまい。又般若心經などを以て、佛教の代表と見んとするやうなことも不心得至極の異端者である。本末輕重を辨へない痴漢といふべきである。こんな事が重なつて自然佛教の眞價を逸し、本師釋尊を誤解するやうにもなり、折角無價の佛教として排棄せんとする氣運を作ることにもなることは罪深い事と思ふ。

日蓮聖人が「天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べき歎」と仰せられた意義は極めて深い。受け難い人間に生れ、而かも大乘の國に生れて法華を識らないやうでは、人生の事も解らねば、

自分自身の事も知れず、佛や神の事も解決つかずして醉生夢死に畢ることとならば洵に遺憾千萬ではありませんか。それでは忠孝の道にもはずれた淺ましい生活であり、死しては墮獄の苦を見るに到ること必定で、人間としては問題にならない。

今や重大なる時局に當面せる我國民は、眞に國家を自分の双肩に擔ふ覺悟あらば、宜しく先づ自ら宗教の尊嚴を領知し、正しい信心を基礎に健闘して戴きたい。人類の平和を愛好し、世界の共存共榮を實現せんとすれば須らく宗教の信仰に依つて、先づ自覺することが第一歩でありますまいか。天下の公道に則り行動せんとするには、宜しく敬虔な態度で信仰の道にいそむべきでしょう。一切善事の根本は實にこの正しい宗教の信仰に依つてこそ徹底して植付けられます、信仰なき生活は浮べる雲の如きもので大事を成し難い。物心兩様の總動員が議せられつゝあ今日、特に宗教の尊嚴を提唱して識者の三省を促す次第であります。

寧ろ當に少く聞いて能く義味を解すべし、
多く聞いて義に於て了せざることを願はされ、
心の師と作ることを願ひ心を師とせされ。

——涅槃經——

記

事

本部團報

國議會

今年の新年會は申す迄もなく例年と相違したものである、一面に於ては戰捷祝賀の奉でもあるが、一面には多大の貴い幾十萬の犠牲を出した悲壯な新年である。そこに年賀状や門松廢止の問題も起つた事であらうが、本部に於ては國議會に際して夫等陣歿諸精靈に邦樂の妙音を献じ、聊か冥福を齎つた次第であつた。即ち正月七日午後二時より、講堂の莊嚴された御寶前に、小西、和賀、山口の諸師は、伊東豊山師の率ゆる一隊樂人に依り奏する妙音の中に着座し、型の如く法味を一同和唱、奏樂中に各位の燒香あつて三時過ぎ閉式。約五分間の休憩。有志感想の段に入るべく、磯部常任理事より一場の年頭挨拶あつて後、和賀謙介氏司會者となり、先づ佐藤鐵太郎中將の感想談を請ふた。佐藤中將はいつも年頭には、干支の話に寄せてよい教訓を與へらるゝが、本年も寅年に因んで、土の上の虎の積りで、千里の道も遠しとせず大に進んでもらいたいのことを話された。

次いで小林一郎先生は指名の下に起たれて、今非常時だといつて居るが、街を歩いて見ると随分暢氣さうです、

お互は大に戒めたい。モット緊張した気分でありたい、南京一つが落ちたからといつて提燈行列して、モウ天下の形勢定まれりと考へるが如きは、餘りにも淺薄な考であるまいか、そんなことでこの大事な所が越えて行かれるものではないでしやう。又一方社會が複雑になるに従つて不平が多くなつて來るといふことも考へなければならぬ。そこで宗教家の活躍すべき時が、今來て居る。眼前の利害獲得を離れて永遠の計畫を立てる者には、本當の信仰を持つて行かなければならぬ本當の信念を養はなければならぬ。今こそ正しき信仰の力を揮ふべき時であるといふことを考へなければいけない、と日蓮主義の信仰を力説された。

それから本團教務の山口智光師や和賀義見師の十分感話に續いて、岩野直英少將の非常時と銃後國民の覺悟に就て極めて適切な話を成され、佐藤中將は國民の首動を此際お互に警戒して行くことが大切である。一體戦を始めた以上、急に終るものではない、アノ日清戦争の如きでさへも十箇月も續いた、日露戦争は一年半も續いた、世界戦争の如きは四年半も續いた。この始末をつける爲には非常な時間を要するでしやう。従つて内國民はお互に警戒合つて輕率首動なく、いろ／＼下らない宣傳には乘らぬやうにして、國內を強くするといふことが今日の急務である、と懇説された。

上田理事長は非常に繁劇の中から、特に萬障を差繰つて遅

ればせに馳せつけ、早速一場の挨拶を述べ、且つ経済と實行に就ての實際問題を提げて滿洲北支の開発に對する高見と、國內の中堅人物に宗教的に思想上に一つの指導原理を與へるといふことが結局吾人の責務であると思ふ、これは團の仕事として是非共やらなければならぬことと考へて居りますと、貴い御決心の色が躍如として一同を歡喜せしめた。最後に井上清純男は、今後我國家としてどんな方向に進むべきであるかといふことに就て、平素の深い御考慮の一端をお述べになり、此の大事な時に若し一步踏み誤つたならば、或は九天から奈落の底に沈むかも知れないと悲憤の面持ちで數千言、多大の感激を與へしめられた。

時は正に五時半、満堂の大家と漸く開權の幕に入るやう、而して又徐ろにお互の隔意ない座談を交へやうではありませんかと、和賀司會者の挨拶に、急がるゝ方や、遠路の人々は大部分お辨當と菓子折を手にしつお別れしたが、残りの男女二十名ばかりは、階上の會議室に移つて、井上男を中心に且つ談じ且つ食しつ、吉野氏の餘興等もあつて九時近く迄、道の爲めに語り合つた。

當日は遙かの東海道濱松から福岡駒雄氏の上京あり、横濱からは金子、貝塚、和田、日山、石毛、佐藤等の熱誠の男女人群の参加あり、其他川崎の毛見氏等近郊市内の法友七十餘名の清い年頭の集りて有意義の會合を見法慶至極と感じた。

和田家の篤志

客臘二十一日七十八歳を以て大圓寂を示された京橋の和田たか女、本正院妙行日澄大姉のあとに淋しく遺された長女のあい子女史は、至孝追慕の情、日夜禁じ難く、せめても出来るだけの善根功德を修して悲母の得脱を祈りたいと、金壹百圓也を本團淨業資金中へ御喜納下さつた。あい子女史は過去三十年孤獨の母君を引取つて、極めて忙しい商賣の中から傳侍し、物質上にも、精神的にも及ぶ限りの孝養を勵んでゐられた、それは丁度三つ児が母を慕ふやうな心持ちで給仕されてゐた。二十年前一度心臓病の爲め危篤に陥つた老母を、今日迄長命せしめたのは専ら女史の孝心に因るものと貴く感ずる。それ丈けに昨今は見るも痛々しい程落膽されて居る。力足らぬが少しでも慰安してあげたい。

前號に一寸記した歳末第七周忌を営まれた長谷川家の持經院妙照日嚴大姉は、この和田御老母のお姉様に相當せられる奇しき因縁ともいふか。本多上人御在世の地明會には、いつも耳がお遠いので最前列に在つて安江夫人等と聞法せられて居た。それやこれを憶んで、本部に於て去月十七日、御兩所の追善回向を營み、御兩家御遺族を始め、本多家からも御参列頂いて、安江、島本、岡野等の舊知數名隨喜参加され、聊

御書講座 一月十一日の火曜日晚から、小林一郎先生擔任の觀心本尊鈔が拜講せられた。本講は從來に見聞せない單なる文上丈の講義丈けでなく、日常の世法開顯的な講義振りで日蓮教學上最も難解とされて居る本鈔が、先生の妙講に依つて現代的に興味深く之を聽聞することの出来るのは、在京の人々の幸福を悦ばざるを得ぬ。

日曜講集 午後二時より四時半乃至五時頃まで、本部教務の諸師に依り、熱誠を罩めた勤行と法話を營み、各位の信仰増進に努力されつゝある。

寒修行會 一月六日から始まつた寒修行は、毎朝六時三十分より八時まで、恰度時計の針のやうに正確に、二月四日まで續行される。参加の人々は備かであつても、平年より一層厳しい寒氣につけて、かの七百年前の佐渡や身延の祖師を追憶しつゝ、力をこめて妙法華經の各一品宛と數百返の唱題が、此道場から佛天に轟いて、正法興隆、皇道繁榮、別しては皇軍の武運長久と、彼我陣歿將兵の冥福が祈られてゐる。速く西荻窪や、中野或は麻布あたりから、参詣さるゝ至誠が、どうして御佛に感應せぬことがあらうか。

因に野口、大下、種村の三氏はこの勝縁を機に、大本尊を感得されたことは自他の歡びに堪えない、彌々御信心の増進を念願する次第である。

か法味を捧げ得たことは悲しい中にも嬉しい事であつた。かかる機會を與へられた事は、偏へに安江女史のお力添の大なるによるが、兩家の却て種々御高配をお煩はせした事は全く恐縮に存じ、茲に恭しく謝意を表しておく。南無妙法蓮華經

高木鑑三郎氏急逝

本多上人時代に、大震災後十三年から昭和六年迄故棍木顯正師と共に淺草の統一閣に事務を執つて居られた純朴、古武士の風格を備へた高木老は、其後大森の寓居に持病を靜養されてゐたが、去る一月九日風邪が因で、急性肺炎を起し惜しくも急逝された。行年七十歳 法號は

顯正院法道日鏡居士
度でその御冥福を祈り奉る。南無妙法蓮華經

團費誌料寄附及維持費領收

(自昭和十二年十二月十九日
至昭和十三年一月二十日)

一金壹圓貳拾錢也	東京	日下部二葉殿	一金貳圓五拾錢也	盛岡	阿部秀三殿
一金貳圓貳拾錢也	彦根	村田台子殿	一金拾圓也	東京	何某殿
一金五圓也	千葉縣	小高了海殿	一金壹圓拾錢也	名古屋	石田よしの殿
一金四圓五拾錢也	廣島縣	村上信夫殿	一金貳圓貳拾錢也	横濱	京田爲太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	津山	渡邊孝殿	一金貳圓五拾錢也	全	稻葉いく子殿
一金貳圓五拾錢也	東京	種村五郎殿	一金貳圓五拾錢也	大阪	久保田英樹殿
一金六圓也	同	野間平次郎殿	一金貳圓貳拾錢也	同山	夏谷泰次郎殿
一金五拾圓也	同	何某殿	一金壹圓也	盛岡	三田常太郎殿
一金貳圓五拾錢也	同	須藤仙吉殿	一金壹圓也	門司	中村謙藏殿
一金貳圓四拾錢也	千葉縣	木村日香殿	一金壹圓也	東京	河瀬由子殿
一金壹圓也	新潟縣	島辰平殿	一金貳圓五拾錢也	東京	尾崎熊吉殿
一金八圓九拾錢也	川崎	毛見春吉殿	一金壹圓也	同	越山雄四郎殿
一金貳圓五拾錢也	横濱	田澤留吉殿	一金五圓也	同	和田たか殿
一金貳圓四拾錢也	大阪	清原淺次郎殿	一金五圓也	同	小峰豐子殿
一金貳圓貳拾錢也	中津	本傳寺殿	一金拾圓也	東京	吉田かつみ殿
一金壹圓貳拾錢也	豊橋	妙圓寺殿	一金貳圓五拾錢也	全	水津傳七殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	宮原やぶ殿	一金貳圓也	同	菊地雄三殿
一金貳圓五拾錢也	横濱	國吉俊男殿	一金貳圓拾圓也	臺中	野口英司殿
一金貳圓五拾錢也	千葉縣	長澤知教殿	一金貳圓貳拾錢也	東京	久野柳子殿
一金參拾五圓也	東京	同心會殿	一金貳圓貳拾錢也	東京	唱行會殿
			一金貳圓貳拾錢也	東京	松嶋妙明殿
			一金貳圓貳拾錢也	東京	長谷川義一殿
			一金貳圓貳拾錢也	東京	寺澤直人殿
			一金貳圓貳拾錢也	横濱	榎田藤三郎殿

六〇

右雜有入帳仕候也

猶從來團費誌料等御送金を戴きし際は、本誌に掲載致すと共に一々領收の御通知申上居候得共、今回經費節約、事務簡捷等の意味より、この誌上領收の報告にのみ止むること可有之豫め御諒承願上申候

財團法人統一團會計

御注意

正團員壹ケ年の團費は金貳圓五拾錢であります、誌友の金貳圓貳拾錢と混同なく、表紙扉の本團略則を御高覧、此際特に護持正法の大事を憶はれてお互は同心となり、この淨業に御協賛御累徳の程切に念上ます。

天の宮殿に於て

王の暴虐にして

是の諸の天王

是の王惡を行じ

造惡を以ての故に

天の瞋を以ての故に

非法の兵伏

疾疫惡病

諸天即便ち

其國敗れて

兄弟姉妹

孤迸流離し

流星數ば墮ち

他方の惡賊

悉く愁惱を懐く

善事を修せざるに由る

各相謂つて言く

惡と伴と爲る

速かに天の瞋を得

久しからずして國敗れ

姦詐の鬭訟

其の國土に集らん

是の王を捨離せば

大愁惱を生ぜしむ

眷屬妻子

身亦た滅亡せん

二の日並び現ず

其の土を侵掠し

人民は飢餓して

是の故に應に

善を以て國を化し

寧ろ身命を捨つるとも

親非親に於て

親非親を視て

正行の名稱

正法をもて國を治めば

常に善心を以て

能く天衆をして

是の故に正治するを

一切の諸天

猶ほ父母の

諸の疾疫多からん。

正法に隨ひて世を治め

非法に順ぜざるべし

眷屬を愛せざれ

心常に平等に

和合して一と爲る

三界に流布せん

人多く善を行じ

國王を仰瞻せば

具足充滿せしむ

名けて人王と爲す

人王を愛護すること

其の子を擁護するが如し。

善集品第十二

爾の時に、如來復た地神の爲めに 往昔の因縁を説き、而も偈を作して言はく、

我れ昔し曾て

夜睡夢の中に

及び比丘を見る

善能く如來の

所謂金光

明かなること日中の

是の轉輪王

即ち尋いで覺寢し

轉輪聖王と爲り

佛の功德を聞き

名を寶冥と曰ふ

正法を宣暢す

微妙經典なり

悉く能く徧照するが如し

是の事を夢み已つて

心善身に偏ねし

鬼神品第十三

爾の時に、世尊 而かも偈を説いて言はく、

若し是の經に入れば

深く法性に如し

即ち是の典

而も我れ釋迦牟尼を

即ち法性に入るなり

其の中に安住す

金光明中に於て

見ることを得

授記品第十四

爾の時に 佛 信相菩薩に告げたまはく 汝來世に於て 無量無邊百千萬億不可稱計那由 他劫を過ぎて 金照世界にして當に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、金寶蓋山王如來と號す。

除病品第十五

流水長者子品第十六

捨身品第十七

爾の時に 世尊偈を説いて言はく

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金貳圓九拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓五拾錢
真理の基礎に對つて佛敎の信仰		全	金拾五拾錢
法華經要品		全	金拾五拾錢
日生上人レコード(四面)		全	金參圓廿五錢
日蓮聖人		全	金拾錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
護持部事蹟		全	金壹圓七拾錢
本多日生上人		全	金拾錢
勸行作法		全	金壹圓
河合珍明著		全	金壹圓
皇道と日蓮主義		全	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ七十ノ六
財團法人 統一部出版
振替東京九四二〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六ノ七十ノ六
振替東京九四二〇番

發行所

金壹圓貳拾錢
金壹圓貳拾錢

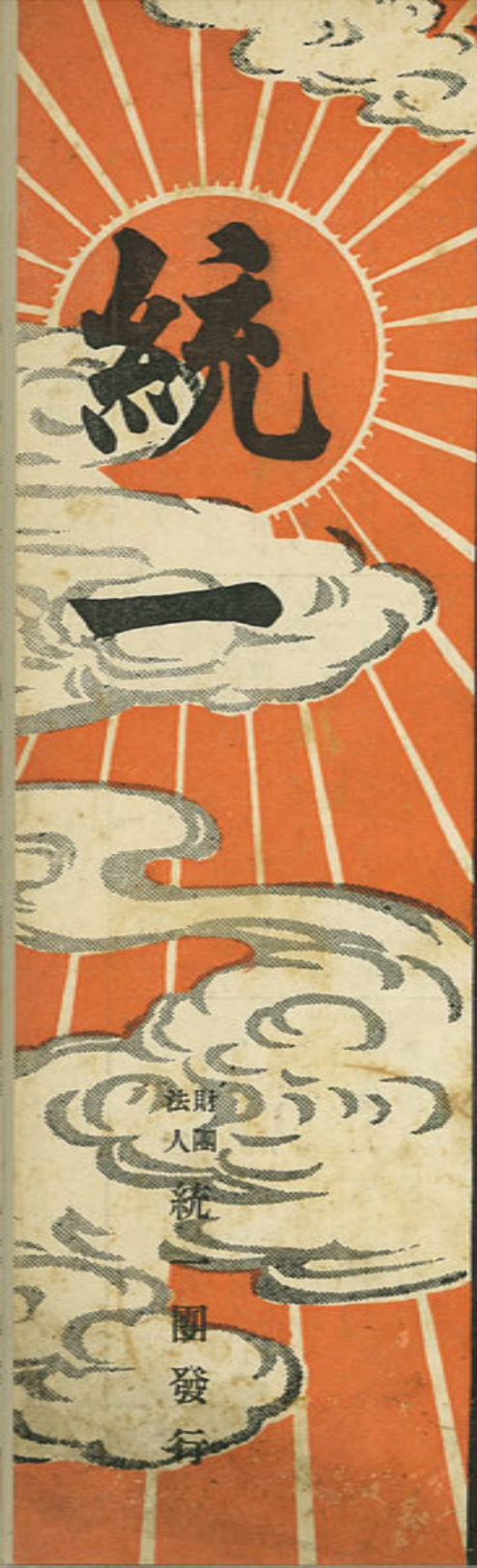
定價	一冊	半年	一年
送料	金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料	金拾錢	金貳圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十二年一月廿七日印刷納本
昭和十三年二月一日發行
(第五百十五號)

不許複製
編輯人 磯部 滿事
發行人 磯部 滿事
印刷人 山田 英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 財團法人 統一部
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

彼岸會に就て……………	本多日生
開目鈔講話(第十七講)……………	小林一郎
信仰は生き返す……………	小西日喜
小西師を憶ふ……………	磯部満事
記事	
○本部関係	
○關島支部報	
○其他	
○團費誌料維持費及寄附金額表	

號月三年三十四第

13,5263